

論 説

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする 中国政治の統治文化(3)

夏

剛

9 . 政治統治の指南 『論語』に見る中国人の「政治動物」性

毛は1969年の党大会の壇上で、得意絶頂の「文革」派を自分の左側に坐らせ、周恩来や失意の古参幹部を右側に坐らせた。「左派」を尊び「右派」を卑しむ当時の意識形態^{イデオロギー}に合う形で、実務派は下座に配置されたわけだが、其の直後に彼は右の4人の老元帥に国際戦略新構想の策定を委託し、其の結果、対米接近の筋書きが出来た。左手に『毛主席語録』を持ち右手で算盤^{はし}を弾く「両手」(二刀流)は、林彪や周恩来だけでなく当の毛にも有った。其の「務虚」(理念の確立)と「務実」(実務の遂行)の使い分けや、門下の10哲及び子華に対する孔子の評価は、左側の理・礼と右側の力・利から成る4要諦図と妙に符合する。

冉求も子路も曾て季氏の家臣を務め、諫める勇気が無いとの理由で孔子から頭数だけの臣とされた¹⁰⁴が、槍玉に上がった2人は熱心な求道も見せた¹⁰⁵。両面具有の彼等及び『論語』は分裂の観も有るが、不義を改めて仁義に就く帰化¹⁰⁶と解せば、中国人の複雑さや孔子の感化力、孔門の包容力の証として不自然ではない。2人が具備し切れなかった賢臣の条件として、「大臣者、以道事君、不可則止」(優れた臣とは、道を以て君に仕え、其が無理なら身を引く)と孔子は言った¹⁰⁷。「出世・入世」の変種とも言える此の複線に通じて、陰陽の変幻自在や清濁合わせて呑む受容は、当事者と傍観者、社会と歴史の常道だ。

孔子及び門弟の語録集・『論語』は元々、時系列に沿って編集された物ではないので、冉求や子路に関して仁義の形象^{イメージ}が突出か先行し不徳の陰影が目立たぬか後に出る展開¹⁰⁸は、主要な側面や最終の結果を重視した逆遠近法に思える。其の副次的な「前科」が突如触れられた後、再び好意的な評価が付け加えられるのは、前出の学童啓蒙教材にも見た「怪圈」^{ミビクスのわ}めく交錯・変異か。自らの廟の庭で天子の舞を舞わせた非礼が孔子の最大な憤怒を買った季氏と子路・冉求と孔子との間に、是非・善悪が流動する三角の巡り合わせが見られる。

季氏は周公や天子への僭越を見せた一方、「三思而後行」(3度思慮して後行なう)の習性の

持ち主だ。孔子は「再思斯可矣」(2度思慮すれば好い)¹⁰⁹⁾と、其の過度な慎重さに異論を挟んだが、『増広賢文』の「三思而行，再思可矣」では、対立の両者は同等の扱いを受けた。『名賢集』の「事要三思，免勞後悔」(後悔を免れる為に、事に当っては3度の思慮が要る)の様に、後世の人々の記憶に残るのは「三思」の方だ。数学の定理も人間の利益に抵触すれば修正されようと言うレーニンの論断の通り、孔子の言が埋没したのは中国人の实事求是の選好¹¹⁰⁾だ。只、「免勞後悔」の主旨は「寡悔，禄在其中矣」と一致する。

孔子は季氏の驕傲・奢侈を痛恨しつつ、相手に心情・信条を開陳した。「弟子孰為好學」(お弟子の中で誰が学問好きと言えるか)と言う季氏の質問は、最愛の顔淵の若死に対する彼の痛惜を触発した。其の『先進篇』の次の『顔淵篇』に出た「政者正也」も、他ならぬ政治に関する季氏の質問への答えだ。此の「季康子問政於孔子」の件^{くだり}の後に、「季康子患盜，問於孔子」(季康子[季氏]は盜賊の事を懸念して、孔子に訊ねた)、「季康子問政於孔子，曰：“如殺無道以就有道，何如？”」(季康子は政治の事を孔子に訊ねて言った、「道を逸れた者を殺して道に沿う者を造る様にすれば、如何だろうか」と続いた。

孔子の助言¹¹¹⁾に拘らず我が道を行き同時に彼を尊重した季氏の2面は、「陰陽魚」の対立・統一の様^{よう}に映る。孔子の政務顧問なる役目・資質・影響力も、刮目して見るべき物だ。季氏が子路・子貢・冉求の「從政」(政治に従事する事)の可能性を打診した処、孔子は其々の「果」(果敢)、「達」(賢明)、「芸」(才覚)を挙げて首肯した¹¹²⁾。其のお墨付きを得た冉求が季氏の征伐の是非に就いて孔子の判断を仰いだ¹¹³⁾事は、孔子の經世濟民¹¹⁴⁾志向と季氏の霸道に対する王道の浸透を浮き彫りにした。季氏の家宰と成った門人・仲弓の「問政」に対する孔子の答え「先有司，赦小過，拳賢才」(先ず役人の活用を考え、小過^{ゆる}を赦し、人材を重用する)は、今の中国と世界に於いても有効性を持つ。

質疑応答が多い『論語』の特色は「学問」の字面と精神の体現だが、「問政」の頻出¹¹⁵⁾は孔門の関心事の所在を示唆する。宋の初代と2代目の帝 太祖・太宗を補佐した宰相・趙普の「半部『論語』治天下」(半冊の『論語』を以て天下を治める)の通り、此の高次「蒙学」教典は政治統治の助言・要諦・指南だ。『論語』に秘めた「算盤」の例に「益者3友，損者3友」を挙げたが、出所の篇名・『季氏』は経済・経営を凌ぐ政治・治世の比重を思い知らせる。其の『論語』+「算盤」の政經一体には、中国人の「政治動物+經濟動物」性も窺い知れる。

「大臣者，以道事君，不可則止」の基準を示した上での孔子の子路・冉求評は、季氏一門の季子然の「仲由冉求，可謂大臣與」(仲由[子路]と冉求は優れた臣と言えるね)への反論だ。「吾以子為異之間，曾由與求之間」(私はもっと貴方が別の事を訊ねると思ったが、何と由と求の事か)と言う孔子の落胆は、梁惠王に対する孟子の「王何必言利」を想起させるが、季氏の「弟子孰為好學」の質問と季子然の賢臣評は、孔門10哲の末席の子夏の「学而優則仕」の指向性に通じる。

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

『論語・八佾第3篇』は、天子の舞 8列・64人の八佾を自分の庭で舞わせた季氏の非礼を、「是可忍、孰不可忍也」（是が我慢できるなら、もう我慢できぬ事は無かろう）と言う孔子の叱咤で始まるが、前篇の『為政』には季氏の真面目な諮問が有る。「使民敬忠以勤、如之何？」（人民が敬虔・忠誠を以て仕事に励む様にするには、如何にすれば能かろうか。）2節前の孔門10哲に無い子張の俸禄取りの学び方に関する質問や、開口一番孟子の治世方策を問う梁恵王の欲求と同じく、強烈な功利主義は否めないが、人民の忠誠・意欲の喚起に掛けた鄧小平の苦心を思い起せば、為政者の使命・宿命も感じる。

生産力の向上を特に重視した鄧の追求は、有力な臣下を欲す季氏の執心と重なる。人の生産性の借用を狙う統治者の「用人之道」は、「仁者、人也」に別の含みを持たせる。主・季氏と師・孔子との間の冉求等の転形は、「不事二君」（2君に事えぬ）¹¹⁶⁾の忠節の非現実性を浮き彫りにする。『三国演義』の中の黄忠は、降伏先の蜀への献身に因り忠臣の誉れを得た。尤も、彼の変則的な英雄を造ったのは中国的な現実主義だ。同じ敗將の魏延を傘下に収めた孔明は其の反骨を知りつつも、自分の死後に反逆を起すまで泳がせ続け精一杯利用した。文書偽造の特殊任務を負う書法家が梁山泊で上位に入った¹¹⁷⁾のも同じ原理だが、敵対同士が同居し諸説・異説が併記された『論語』¹¹⁸⁾には、中国の人種・観念の坩堝の真髄が見える。

宋江の醜（上記の醜聞・醜態）・弱（文弱・優柔不断）は彼の副次的な側面であり、立派なイメージの美+厚い人望の強こそが英雄（主人公）たる条件だ。民衆の「久旱逢甘雨」の欲求に応える「及時雨」（恵みの雨）の美称には、劉備と共通した彼の指導者の資質が集約される。孔子の故郷、孔門及び梁山泊好漢の本拠地・山東は、忠節と反逆の精神が共に旺盛である点に於いて、中国人の2重性が好く現われる土地だ。一方、『三国演義』の北（魏）・南（呉）・西南（蜀）の3極は、現代中国の権力構造の特質を分析する視座なり得る。

10. 「互聯合衆国」の域内「文化溝」及び国家統治への投影

毛沢東は自分はマルクス主義者に成る前にも成った後でも中国人だと言¹¹⁹⁾、鄧小平は「具有中国特色的社会主義道路」（中国の特色を持つ社会主義の道）を提唱した。何れの主張でも舶来の理想に対して中国が主体を成すが、中国は帝国・民国・共和国の形態に拘らず、民族融和共同体や「互聯」合衆国¹²⁰⁾の観が強く、「中国特色」は更に「民族」（1民族=集合的な「中華民族」；多民族=中華民族の主体 漢族、及び55の少数民族）特色）や「地方特色」に細分化できる。

人間の性分に影響を与え民族の表徴と成る食は、其の肉迫の切り口として有効的である。『広辞苑』の「中国（中華）料理」の語釈は、北・南の2系統と大別し其々の代表に炒め・揚げ料理と煮込み・蒸し料理を挙げた。此等の流儀は火を通す点で共通し、素材の持ち味に拘る

日本料理¹²¹⁾と対照的な人工性・征服志向が中国的な性質と考えられるが、火の加減と使用時間に於いて炒・炸と煮・蒸の間に、『漢書・地理志』の「域分」(地域の気質の違い)の5類型「剛・柔・緩・急・声」¹²²⁾の最初の2対の相異が見られる。

楊東平に由る北京と上海の比較文化論の序説¹²³⁾に、「南豆腐・北豆腐」を始め¹²⁴⁾南北の様々な違いが取り上げられた。性格の「南柔北剛」、料理の「南甜北鹹」、交通の「南船北馬」、武術の「南拳北腿」、美意識の「北 = 壮烈・古道西風；南 = 艷麗・杏花春雨」¹²⁵⁾、経済の「南富北貧」、政治の「南 = 革命；北 = 保守」¹²⁶⁾等は常識的な図式であり、哲学・文学の「南道北儒」も前出の「外儒内道」の支援材料に成るが、「京派」(北京流)と「海派」(上海派)の2極対峙¹²⁷⁾に拘り過ぎると、東西の対を圏外に置く恐れが有る。

例えば、南の人が甘い物を好み北の人が塩辛い物を好むとは一面に過ぎない。唐辛子に目が無い湖南の毛沢東や四川の鄧小平¹²⁸⁾の様に、同じ南方でも甘(甜)と逆の辣(辛)が大好物たり得る。此の2省からの中共の党・軍の指導者の輩出は、毛の「不辣不革命」(辛い物が好きでない者は革命者とは言えぬ)の断言の証左だが、同じ南の江蘇出身の周恩来は北で10歳代を過ごしたにも関わらず、唐辛子には遂に馴染み切れなかった¹²⁹⁾。葉劍英も広東人の清楚・淡泊な味覚の所為^{せい}で、毛の基準を満たさなかったはずである。

諺の「味覚は3代」の通り食の好悪は人間の根性の奥底の問題で、過激な故の「辣 = 革命」の相関の様に其の嗜好は志向とも無関係ではない。韓文甫は出生・成育の環境が鄧小平に与えた影響を分析する際に、正に上記の4省を地域の特性の典型に挙げた。曰く、江蘇の人は周恩来の様に「伶俐乖巧，温文恭順」(八方美人・温和恭順)、湖南の人は「剽悍勇猛，驃子脾氣」(剽悍勇猛・天の邪鬼)、四川の人は移民の天国なる土地柄に相応しく余所者を上手く包容し、広東の人の強烈な排他性と著しい対照を成す¹³⁰⁾。

盆地ながら閉鎖せず米国の様な人種の坩堝の観が有ると言う故郷¹³¹⁾は、或いは鄧の開放路線の母胎かも知れぬ。一方、広東の葉劍英も開放の推進派だった。客家(「客」の字面通り移民¹³²⁾)の血統、西欧留学の経歴と豊かな文芸素養¹³³⁾等の個人的な要素も大きいが、広東は言語の壁で華南以外の全国と距離を保つ¹³⁴⁾反面、海外との交流は盛んである。中国語の「域・宇」の同音・類義(『辞海』の「域中」の定義 = 「宇内；天下」¹³⁵⁾)が象徴する様に、多地域連合体の中国は擬似国際社会と見て取れ、其処にも対外開放の必然性が有ろう。

『広辞苑』の「中国料理」の「大きくは北京料理・広東料理の南北2系統に分れ、前者は濃厚で、炒菜(炒め物)・炸菜(揚げ物)が特色。後者は淡泊で、蒸菜(蒸し物)・焼菜(煮込み物)が特色。このほか、南京料理・四川料理なども有名。」は、四川料理の鮮烈を觀ても明らかに不完全だ。『辞海』に「中国菜(料理)」の項が無いのは、一口で概括し切れぬ多様性も要因と思える。古典小説の4大奇書¹³⁶⁾や現代京劇の4大名優¹³⁷⁾から、人民元新札を飾る4大領袖¹³⁸⁾等まで、中国人は芸道等の頂点の傑物を対の2乗で並べる習性が有るが、中国料理を代

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

表する4大流派の定説は内紛を恐れる所為か無い¹³⁹）。

中国料理の豪華さを端的に物語る満漢全席の異族混合¹⁴⁰が好例の様に、単一の「中国特色」は有り得なく重層的な其は有り得る。『広辞苑』が説いた南北料理の濃淡は重要な基軸だが、補足に挙げた南の中の東・西の対（南京・四川）と合わせてこそ、海内の四方が一応揃う形に成る。専ら南北の最大な2都に在る東部沿海へ目を注ぐ楊東平は、中国文化を中原文化・江南文化・嶺南文化（珠江流域）と3分した¹⁴¹が、「民族」の概念を最初に使った梁啓超の黄河・長江・珠江3分法¹⁴²がより全面的だ。其々広域の中原¹⁴³、長江の上・下流と珠江に位置する北京、四川・南京と広東は、文化「域分」の典型の価値が高い。

長江中流の湖南・湖北は其処に欠落したが、「両湖」の様な「魚米之郷」（魚・米の産地）や料理が名高い長江・珠江流域に、20世紀の中国を動かした孫文（広東）・蒋介石（長江下流の浙江）・毛沢東・鄧小平が生まれた事は、食生活や物産の豊かさとの相関、文化の成熟と傑物の輩出との相関を示唆する。此の3人に対して辛亥革命前の皇帝は北方の漢・満や他の民族が殆どだったが、北京・四川・南京・広東の菱形+南北・東西の交差点に当る華中は、権力中枢の色合いや指向性を窺わせる左右・上下対称の5極を成す。

人間の存在は人間の意識を決定すると言うマルクスの論断は、色々な面で有効性を持つ。儒教は「修身・齊家・治國・平天下」を人格完成の4段階とし、個我の身を全ての資本・基礎と規定した。精神主義の外観とは裏腹の此の物の観方は儒教の現実主義の本質の証だが、身 家 國 天下と言う拡大対応の図式に即して思えば、地域は身・家と國・天下の繋ぎ目に当る。「国家」の字面は2つの対に跨がる家・國の複合だが、日本語の「国」の家郷の意味合いの通り、地域は國家の基本的な構成単位として重要で重層的な存在だ。光栄にも中華民族の一員の資格を以て世界公民と成った自分は、中国人民の息子であり自分の祖国と人民を深く愛している、と晩年の鄧小平は述懐した¹⁴⁴が、此の「国家（中国）・世界」を「家郷（四川）・国家」と読み換えても、似た帰属意識や愛着は成り立とう。

11. 指導者の出身地に見る共産党中国の理・礼・力・利の「重心移転」

辛味に対する毛・鄧と周・葉の嗜好度の違いは、其の政治手法の持ち味にも投影された¹⁴⁵。毛と鄧、周と葉の共通は西南と華中、華東と華南の類似を示唆するが、論題の4要諦と結び付けて、西南・華中 力、華東・華南 利、北方 理+礼、という地域別の価値指向の仮説を立てたい。「文革」後の階級闘争から経済建設への路線転換は、「工作重点移転」（仕事の重点の転換）と命名されたが、共産党中国の半世紀の歩みには、指導者の地域特色を映す移り変りが見受けられる。指導部に於けるメンバースペシャルの構成員の特質形成の母体 出身地の比重の変動は、理・礼・力・利の間の価値基準の「重点移転」の軌跡と重なる。北方/華東・華南/西南・華中の

「3軸5方」¹⁴⁶⁾は、此の現象に基づく実事求是の観方だ。其の「実事」(事象。事実。実情)と「是」(真理。原理。結論)は、時系列で整理すれば次の通りである。

「文革」前の7巨頭の中で、5人が華中/西南(毛沢東・劉少奇=湖南; 林彪=湖北/朱徳・鄧小平=四川), 2人が華東(周恩来=江蘇; 陳雲=上海)の出身だが、此の体制の志向と実績は主たる「力治」+副次的な「利治」に他ならない。

「文革」中に毛・林・周と共に権力の中枢を成した「5人組」は、華東の姚文元(浙江)を除く全員が北方の人(江青・張春橋・康生=山東; 王洪文=吉林)だが、意識形態への傾斜を伴う「力治・理治」の肥大化と「利治」の無力化に符合する。

「文革」後~天安門事件の歴代指導部は、鄧小平・楊尚昆(四川)/胡耀邦(湖南)・李先念(湖北)が西南/華中、葉劍英(広東)/陳雲が華南/華東、華国鋒(山西)・趙紫陽(河南)・万里(山東)が北方、李鵬が南北混合(上海生まれ、四川・陝西等育ち¹⁴⁷⁾)で、「力治・利治・理治」の重層に吻合する組成だ。

天安門事件後は、江沢民(江蘇)・喬石(浙江)・胡錦濤(安徽)が華東、朱鎔基(湖南)が華中、李瑞環(河北)が北方、李鵬が南北混合だ。西南の出身者が頂点から消えた事は、「力治」の後退と安定社会への移行の表徴に思えるが、新指導部の色合いは本格的な「儒商」時代に相応しい「利治・理治」の複合だ。

「文革」中も天安門事件後も「上海幫(閩)」が槍玉に上がったが、上海に基盤を置いた「4人組」は1人も地元の出身者ではない。総書記就任後の江沢民は上海時代の側近を多く重用し「新上海閩」の批判を招いたが、彼と上海の縁も大学時代が起点なのだ。「文革」中の「山東閩」の跳梁¹⁴⁸⁾は梁山泊の故事を思い起こせば必然性も感じるが、揚州の人・江沢民が改革・開放時代に最高位に就く最長記録を創ったのも運命の悪戯ではない。揚州の歴史に見る次の3点の「中国特色」は、其の選択の天意の正当化の材料に挙げられる。

春秋末期に一部が出来上がった運河が北京-杭州を連結する大運河(全長1794キロ)に成ったのは、隋・元の拡張の結果であるが、最初の再建の契機は揚州の景観を見たいと言う隋煬帝の願望だったとされる¹⁴⁹⁾。威勢を顯示する為の其の巡幸の規模と贅沢は、中国的な「物量主義・大快楽主義」の見本だ。

物量・享楽志向は結果的に東部沿海地域の南北交通樞紐を築き上げ、明・清時代の全国最大の産額を誇る両淮(江蘇・安徽)塩「集散地」(流通の中継根拠地)・揚州の産業の発達を促し、塩商の協賛に由る清初の文化の爛熟に寄与したが、欲望と生産性の連動も利得と文化の両立も中国的な大欲だ。

50歳の隋煬帝が南巡中に揚州で家臣の禁軍首領等に暗殺され統一帝国が終焉し(618年)、千年余り後に清軍が揚州を陥落させ無数の民衆を虐殺した(1645年の「揚州10日」事件)。内乱や異民族の侵略に因る被害は、建設・繁栄の光の裏に破壊・滅亡の影を落とすが、江沢民時

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

代の合い言葉 「徳治」は、受難・繁盛の歴史から来た故郷の安泰志向・「儒商」伝統に合致する。

江蘇北部の人間は曾て銭湯・散髪等の職業の出稼ぎ労働者が多く出た土地柄の所為で、主な出稼ぎ先 上海では卑賤のイメージが付き纏い、有形無形の差別を受け続け今日に至った。其の江北・蘇北の出身者の江沢民が上海市長を務め更に全国の領袖に成り上がった変貌は、類似業種の出稼ぎ労働者が東京で差別された新潟の人・田中角栄が首相に成った日本の高度成長と二重写しに成る¹⁵⁰。新潟の温泉宿を舞台とし東京の男と地元の売笑婦の触れ合いを描いた川端康成の『雪国』（1935～47年）にも、「笑貧不笑娼」の匂いが嗅ぎ取れるが、貧困脱出の欲求が原動力を成す中共の領袖には江は意外と相応しい¹⁵¹。劉邦・項羽と同じ江蘇北部の生まれ¹⁵²で没落官僚の父親を持った周恩来も、『易経』の「窮則変」（窮すれば変ず）を擬った毛沢東の「窮則思変」（窮乏すれば変化を志す）の好例だ。

此の「思変」は動詞＋目的語の構造であるが、名詞＋述語の「思変」（考えが変る）は此の文脈で、「江南の橘、江北の枳」を連想させる。『広辞苑』で「揚子江の南岸に生えている橘を、北岸に移し植えると枳殻に変化する。人も境遇に因って性質が変る事の譬え」と解された此の熟語は、『淮南子・原道訓』が出典なのに中国では余り聞かない。「江北人」に対する差別の裏返しとも思えるが、存在が意識を決定し其の意識が又存在に影響を及ぼすと言う双方向の相関は、江北の南・北に跨がった周恩来の経歴にも見られる。彼は江南の祖籍（浙江省紹興）¹⁵³と江北の出身地の複合の上、10歳代を瀋陽・天津で過ごし日・仏にも留学し、南と北、海内と海外の重層を重ねた。

南の陰・柔と北の陽・剛の兼備を好む中国人は、「南人北相、北人南相」（北方人の[豪放な]相貌を持つ南方人、南方人の[繊細な]相貌を持つ北方人）を尊ぶ。毛沢東・周恩来の神格化の要素とも成った「男人女相」（女性の相貌を持つ男性）¹⁵⁴は、「陰陽魚」の対立・統一構図の端的な体現と言える。「南・男」の同音と関わって、「南人北相」は毛・周・鄧・朱鎔基の共通項だが、境遇の変化に伴った彼等の内面や規模の変化は、「江南の橘、江北の枳」の次元を超える。高等教育に縁が無かった3指導者の若い頃には、周・鄧は可能性を求めて海外に飛び出、毛は北京大学で図書館員を務めた。朱は同じ北京の最高学府・清華大学に、江沢民は同じ理工科の名門 上海交通大学に入った¹⁵⁵。何れの移動も「人往高处走、水往低处流」（人は高い処に行き、水は低い処に流れる）の道理に合うが、曾て清華大学を目指した事の有る周¹⁵⁶の江北 瀋陽 天津 日・仏の足跡は、別の上昇志向と「域分」を感じさせる。

（未完。最終回は次号）

2002. 6. 30（サッカー・ワールドカップ閉幕日、筆者来日15周年の日）

註

- 104) 後出の「大臣者，以道事君，不可則止。」(出所=註107)に続いて、「今由與求也，可謂具臣也。」(此の冉求と子路は，頭数だけの臣と謂うべきだ)と有る。
- 105) 師に教示を請ったり師と論議を交わしたりする2人の求道ぶりは、『論語』の次の個所に現われる(紙幅の都合で引用は割愛する。括弧内の漢字数字は篇の番号，アラビア数字は篇内の語録番号。番号は楊伯峻『論語訳註』に従い，金谷治訳註『論語』と若干ずれる場合も有る。以下註108, 115, 118も同様)。
- 冉求の場合 六，七，十一²²²⁶，十三
- 子路の場合 二，五²⁶，十一²²，十三²⁸，十四²²⁴²，十五，十七²³，十八
- 106) 「帰化」は『広辞苑』で、「イ [論衡程材 “ 帰_レ化慕_レ義 ”] 君主の徳化に帰服すること。口 [後漢書循吏伝・董俠] 他の地方の人がその土地に移って来て定着すること。(naturalization) イ志望して他の国籍を取得し，その国の国民となること。口 [生] 人間の媒介で渡来した生物が，その土地の気候・風土に馴染み，自生・繁殖する様に成ること。」と解されたが，『辞海』の「旧謂帰服於教化。《論均・程材》：“ 故習善儒路，帰化慕義，志操則励，変從高明。” 引申為帰順。《三国志・魏志・鄧艾伝》：“ 作舟船，豫順流之事，然後發使，告以利害，吳必帰化，可不征而定也。” “ 入籍 ” 的旧称。」の通り，「帰化」は中国では差別語として今や使わない。
- 「徳治」の究極の目的は王道を以て民衆を帰服させる事だが，「中華思想」の悪評の付き纏う中国が「天下帰心」の願望を捨て，逆に島国の日本が其の名残りを引き継いだのは，興味を引く現象である。平均的な中国人の感覚では，日本の傲慢を感じ取り曾ての「王道楽土」の合い言葉を連想しかねない。
- 107) 『論語・先進篇第11』
- 108) 冉求は季氏への協力の為に孔子の譴責を受け(三，十一)，季氏の征伐の是非を孔子に訊ねる彼と子路は制止せぬ無作為で叱咤された(十六)が，2人は揃って孔子に能力を認められ(五，六，十一²⁴)，子路は勇・智等に因って孔子の賞讃を受け(五，九²⁷，十一)。
- 109) 『論語・公冶長篇第5』：「季文子三思而行。子聞之曰：“ 再思斯可矣。”」毛沢東は『反対党八股』(1942年)の中で，孔子の「再思」を肯定的に取り上げた。
- 110) 「選好」は昨今の経済報道等に「投資家の - 」等の用法で割と好く出るのが，「国語辞典 + 大百科事典の最高峰」と自讃した『広辞苑』第5版(1998年)には勿論，『講談社カラー版 日本語大辞典』第2版(梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原野明監修，講談社，1995年)や，語釈の個性を以て『広辞苑』並みの人気を博した『新明解国語辞典』(三省堂)の第5版(金田一京助・山田忠雄 [主幹] 他編，1997年)，乃至大容量を誇る『日本国語大辞典』(日本国語大辞典第2版編集委員会・小学館辞典編集部編，小学館，2002年，全13巻)等にも見当らぬ。珍しく此を収録した『大辞林』第2版(松村明編，三省堂，1995年)の項は，「他よりも或るものを好む事。“ 国民生活 - 度調査 ” と解す。「経済動物」の渾名が付いた世界第2の経済大国の権威有る国語辞典に此の用語が入らぬ事は，中国語に比べて「算盤」志向が薄い日本語の特質を垣間見せる。
- 111) 本系列論文の続篇に当る別の系列論考で詳述する予定。
- 112) 『論語・雍也篇第6』の「季康子問：“ 仲由可使從政也與？ ” 子曰：“ 由也果，於從政乎何有？ ” 問：“ 賜可使從政也與？ ” 子曰：“ 賜也達，於從政乎何有？ ” 曰：“ 求可使從政也與？ ” 子曰：“ 求也芸，於從政乎何有？ ” (季康子が訊ねた，「仲由 [子路] は政治を遣らせる事が出来ますか。」孔子は言った，「由は果断なので，政治を遣らせても問題は有りません。」「賜 [子貢] は政治を

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

遣らせる事が出来ますか。」「賜は賢明なので、政治を遣らせても問題は有りません。」「求[冉求]は政治を遣らせる事が出来ますか。」「求は才覚が有るので、政治を遣らせても問題は有りません。）」

113) 『論語・季氏篇第16』(註108で触れた十六)

114) 「経済」の語源と成る「経世済民」は、現代にも生きる中国古代の『論語』+「算盤」の概念として、本系列論文の続篇に当る別の系列論考で詳述する予定。

115) 『論語』に於ける「〇〇(聞き手の名)問〇〇(概念。用件)」の問答の中で、「問政」の回数は最多の8回に上る。本稿筆者が検索した結果、他の16種と合わせて35個所の当該表現は、次の通り分類できる(出現頻度の高い順で配置。頻度が同じ場合は篇・節順[括弧内の漢語・アラビア数字が番号]。質問の受け手は特記の無い場合は孔子)。

「問政」8回(十二 , 十三), 聞き手=子貢, 齊景公, 子張, 季康子, 季康子, 子路, 仲弓, 葉公

「問仁」7回(十二 ②, 十三 , 十五 , 十七), 聞き手=顔淵, 仲弓, 司馬牛, 樊遲, 樊遲, 子貢, 子張

「問孝」4回(二), 聞き手=孟懿子, 孟武伯, 子遊, 子夏

「問君子(=君子の条件)」3回(二 , 十二 , 十四④), 聞き手=子貢, 司馬牛, 子路

「問知(=知性)」1回(六②), 聞き手=樊遲

「問事鬼神(=神靈に事える事)」1回(十一), 聞き手=季路(子路)

「問善人道(=善人の在り方)」1回(十一), 聞き手=子張

「問明(=聡明)」1回(十二), 聞き手=子張

「問崇徳弁惑(=徳を高め迷いを除く事)」1回(十二), 聞き手=子張

「問友(=交友)」1回(十二③), 聞き手=子貢

「問恥(=廉恥)」1回(十四), 聞き手=原憲

「問成人(=人格の完成)」1回(十四), 聞き手=子路

「問事君(=君主に事える事)」1回(十四②), 聞き手=子路

「問陳(=戦陣)」1回(十五), 聞き手=衛靈公

「問行(=行ないが通用する条件)」1回(十五), 聞き手=子張

「問為邦(=治国)」1回(十五), 聞き手=顔淵

「問交(=交際)」1回(十九), 聞き手=子張の門人, 受け手=子張

聞き手別で集計すると、出現頻度の上位3人は子張(6回)、子路(5回)、子貢(4回)、以下は3回の樊遲、2回の顔淵・司馬牛・季康子・仲弓が続く(1回は略)。子張が唯一人質問を受ける番に回ったのは、師の教示を請う彼の熱心さを考えれば頷ける。

猶、最も頻度の高い聞き手に由る最も関心が高い質問を調べた処、「子張問政。子曰：“居之無倦，行之以忠。”(子張が政治の事を問うた。孔子曰く、「位に居て倦む事が無く、忠誠を以て之を行なうのだ。)」)に当たった。余りにも知名度が低いので些か拍子抜けしたが、周恩来が模範的に実践した左様な淡々・肅々たる流儀こそ、平凡な偉大とも言うべき孔子の極意かも知れない。因みに、此の語録が入った『顔淵篇第12』は、孔子の最愛の弟子・顔淵の名を冠する物だ。

116) 『史記・田単伝』：「忠臣不事二君，貞女不更二夫」(忠臣は2君に事えず、貞女は2夫を更えぬ)。

117) 108名の梁山泊好漢の最終的な序列では、其の「地文星聖手書生」・蕭讓は第46位。同じ文書偽

造作戦で篆刻の腕前を揮った「地巧星玉臂匠」・金大堅は第66位(『水滸伝』第71回・『忠義堂石碣受天文 梁山泊英雄排座次』)。宋江救出の為に軍師・呉用が計謀を弄じて2人を梁山泊を誘い込んだのは、他ならぬ第39回・『潯陽樓宋江題反詩 梁山泊戴宗伝假信』(註96参照)の話だ。

- 118) 『辞海』の「子路」の事績に、「性直爽勇敢、曾对孔子的“正名”主張表示懷疑」(性格が率直・勇敢。孔子の「正名」の主張に懷疑を表わした事が有る)と有る。件の衝突は『論語・子路篇』の「子路曰：“衛君待子而為政，子將奚先？”子曰：“必也正名乎！”子路曰：“有是哉，子之迂也！奚其正？”子曰：“野哉，由也！君子於其所不知，蓋闕如也。”」(子路が訊ねた、「衛の君は先生に由る治世を期待していますが、先生は何を優先されますか。」孔子は言った、「勿論名分を正す事だね。」子路は言った、「是ですから先生は愚直ですね。[不急なのに]何故其を正すのですか。」孔子は言った、「乱暴だね、君は。君子は自分の解らぬ事では意見を控える者だ。’)続く孔子の「名不正，則言不順；言不順，則事不成」(名分が正しくなければ言葉も順当でなく、言葉が順当でなければ仕事は成功しない)は、中国人社会の常識として人口に膾炙するが、其の前に上記の不穏な言説が出るのは愉快だ。

猶、子路と孔子の意見が相異した場面は他にも有る(六^㉔、九[、]、十一^㉕、十五[、]、十七^等)。

- 119) 権延赤『走下神壇的毛沢東』、中外文化出版公司、1989年、201頁。猶、ニクソン・元米大統領の『指導者とは』(徳岡孝夫訳、文芸春秋、1986年[原典=1982年])に拠ると、「或る時、1人の記者が周(恩来)に、貴方は中国の共産主義者が共産主義の中国人かと問うた事が有る。答えは“私は共産主義者であるより先に中国人だ”であった。」(254~255頁)
- 120) internetの正式な中国語訳名「国際互聯網」に因んだ表現。「互聯」は相互連絡の意。実際にも、中央人民廣播電台(中央ラジオ放送局)の「文革」を挟んだ長年の夜の黄金時間帯のニュース番組の名称は、「各地人民廣播電台聯播節目」(聯播=連合放送。節目=番組)。
- 121) 『広辞苑』の「日本料理」の解:「日本で発達した伝統的な料理。その特色は材料の持味を生かし、季節感を重んじる。」
- 122) 123) 124) 125) 126) 楊東平著、趙宏偉・青木まさこ編訳『北京人と上海人 攻防と葛藤の20世紀』(日本放送出版協会、1997年。原典=『城市季風 北京和上海的文化精神』、1994年)、28~36頁。
- 127) 註122文献、第2章題、51頁。
- 128) 唐辛子を沢山入れた料理に目が無い毛沢東の辛い物好きは好く知られるが、鄧小平の嗜好も相当な物だ。例えば、内戦中に江西根拠地の視察先で豚肉をご馳走に成った時、「1つ足りない物が有る」と無遠慮に唐辛子を要求した。接待側が新しい唐辛子を1把探して来たが、彼は早速口に放り込んで、「余り辛くないが、まあまあだ」と言って楽しんだ(毛毛著、長堀裕造他訳『我が父・鄧小平 若き革命家の肖像』、徳間書店、1994年[原典=1993年]、379~380頁)。
- 129) 戦争中に毛が唐辛子を美味しそうに大量に食べており、傍で周が勉めて食べようとしたが、辛さで涙が出て遂に多く食べられなかった、と言う逸話がある。人間同士が社会・心理・生理の3次元で俱に馬が合う事は、斯くして至難の業である。趙峻防・紀希晨『2月逆流 中国・1967年紀事』(春風文芸出版社、1986年)に拠ると、毛が1967年元旦「中央文革小組」の面々を食事に招待した時、姚文元・戚本禹に唐辛子を勧め、君等江南の秀才にも此の革命的な味を覚えて欲しいと言った。2人は余りの辛さで汗が出たが、無理して美味しそうに食べた。次に勧められた張

春橋は思わず一番大きい物を口に入れ、「若い頃『西行漫記』（E.スノー『中国の赤い星』）を読み、唐辛子を食べ始めました。意志を鍛え、主席に従って革命をして来たのです」と言った。毛は笑って曰く、「古来より齊魯（山東）に豪傑多し。春橋、^{さすが}流石に齊魯の風格を失わずだな。」（立花丈平・斎藤匡史訳『2月逆流「中国文化大革命」1967年』、時事通信社、1988年、15頁）戚本禹も山東の人（註148参照）であり毛は勘違いしたのだが、張も毛の影響で唐辛子に挑戦した事は、同じ山東の江青が毛の此の嗜好に馴染み切れなかった事（曉峰・明軍主編『毛沢東之謎』、162頁）と共に、唐辛子選好圏と非選好圏との断層を物語る事象だ。毛が姚文元と同じ浙江の周（註153参照）より、心情的に張春橋や江青を好んだのも頷ける。因みに、中国語の「対味」は「口に合う」と「好みに合う。気に入る」の2義を持ち、後者は否定形の用法が多い。

唐辛子に弱い周は酒豪で毛は逆に強い酒は受け付けぬ体質だったが、酒の味も中国語で「辣」と言うだけに、個人差だけでなく同じ生理の次元に於いても領分の差が有るわけだ。「詩仙・酒仙」の李白に心酔しつつ酒を嗜めぬのも、毛の2面性の1つに数えられるが、周が余り水泳できぬ事も運命の悪戯だ。唐辛子の場合と同様に、無理に毛に合わせようとしてもどうにも成らなく、毛が避暑地の海で泳ぎ大波が襲来した時も、彼は海岸に立って大声で呼び戻すのが精一杯だった（程華『周恩来和他的秘書們』、中国広播電視出版社、1992年、401頁）。

南方の人は水泳が得意で北方の人に「旱鴨子」（陸地の家鴨〔水に入れぬ・泳げぬ人の比喻。「旱」は「旱地」の略で「水」即ち河・海の対概念〕）が多い、と言う相場は其処で崩れる。周が建国後一流の選手に教わっても上達せず遂に諦めたのは、馬からの転落に由る腕の不自由が理由だ（南山・南哲主編『周恩来生平』、上、414～416頁）が、「南船北馬」の図式で考えれば彼の北方的な体質も強く感じられる。因みに、彼は体の頑丈さの秘密の一端として、若い頃に東北で高粱の飯で鍛えられ「底子」（基礎）が出来た事を挙げ、建国後も定期的に雑穀を食べていた（程華『周恩来和他的秘書們』、295頁）。

上記の周の水泳習いの経緯にも、興味を引く点が幾つか有る。日本の諺の「六十の手習い」の通り、其は63歳の1960年の事だった。生まれて初めて水中で浮力原理を体験した時の彼の興奮は、同じ年に劉少奇、朱徳、陳雲が水泳を習った事と共に、「南方人＝水泳得意」の固定観念を打ち破る事象だ。全国的な規模の大飢饉が発生した時期だけに、「中央首長」の生活の余裕も垣間見られるが、周が腕の不自由を顧みず水泳に挑戦した動機も注目に値する。他の指導者たちが皆泳げるのを見て羨んだのが起因だと当時の教練が証言したが、仲間外れに甘んじたくない横並び意識と共に負けず嫌いの心理も読み取れる。

其の「眼熱」（羨望）は人に因っては、「眼紅」（嫉妬。血眼に成る事）と紙一重の差しか無い。水泳が「狗爬式」（犬掻き式）しか出来ぬ江青は、泳ぎ上手な王光美（劉少奇夫人）が居るプールには決して入らなかった（H.E.ソールズベリー著、天兒慧監訳『ニュー・エンペラー 毛沢東と鄧小平の中国』、福武書店、1993年〔原典＝1992年〕、71頁）が、王の学歴（北京・輔仁大学卒）、容姿、教養・能力等に対する彼女の嫉妬は、「文革」中の劉少奇夫妻への迫害の遠因とも見られる。

^{くだり}件の事故は同行の江青の馬の暴走を避ける為に起きたのだが、江青の故郷 山東は同じ省の莫言の小説・『赤い高粱』（1986年）の通り高粱が多く、東北の人には山東からの移民が大勢居た。江が傾倒していた女帝・武則天（山西の出身）は、臣下たちに威勢を顯示すべく暴れ馬を征服して見せたが、彼女に魅了され後に暴走を許した事は毛の南北交合と言うべきか。天津の実業家の家庭で生まれた王光美に劉少奇が魅せられたのは、別の意味の南北結合とも言えよう。

江青は車や飛行機を操縦する外国要人の余暇の楽しみ方に倣って、1969年に周囲の反対を顧みず自動車運転の練習に取り組んだ(楊銀祿著、莫邦富・鈴木博・廣江祥子訳『毛沢東夫人 江青の真実』、海竜社、2001年[原典=『我給江青当秘書』、2000年]、64～66頁)。国際社会での落伍を嫌う心理の反映としても興味深いが、「文革」の最中に極左派の旗手が「西方資産階級生活方式」に秘かに憧れていた事は、国内の階級闘争と国際情勢の緊迫に因り運転手や護衛が移動途中で敵に殺された場合、自ら運転して危険から脱出できると言う建前の理由と合わせて面白い。

猶、「早鴨子」は日本流で「金鎚」と言うが、中国語の「錘(鎚)子」(ハンマー)は短小な男性性器を指す隠語として、四川では男性に対する最大な侮辱語と成る。因みに、昨今の大陸ではMicrosoftの訳語「微軟」は、男性の短小・勃起不全を揶揄する隠語にも使われるが、情報技術革命の発祥地と王者 米国へのコンプレックスの裏返しを窺わせる現象だ。

130) 韓文甫『鄧小平伝 革命篇』、39頁。

131) 米国人は人に対して、どの国から来たかは訊かず、何時^{いつ}米国に来たかを訊くが、四川の人も同様に、余所者に対してどの省の出身かは訊かず、何時^{いつ}四川に来たかを訊く、と韓文甫は言う(『鄧小平伝 革命篇』、40頁)。

132) 『辞海』の「客家」の解に拠ると、漢語の広東方言で「哈卡」(Hakka)と言う此の言葉は、「客而家焉」(移住、後に定住)或いは「客戸」(移民)の意だ。最初は西晋(4世紀初め)に黄河流域の一部の漢人が戦乱の為に南下し、更に唐末と南宋末(其々9、13世紀末)に大量に長江以南の江西・福建・広東に移った。「当地原来的居民」(現地の原住民)と区別する為「客家」の名称が生じたが、漢人の此の支系は広東の梅県等に最も集中し、広西・四川・湖南・台湾・海南島等の一部の地域や海外の南洋一帯にも一部分布している；客家話を操り、女性の地位は高く、纏足せず労働に参加し、封建的な陋習の束縛を受けなかった、と言う。

此の客家の由来・特質で注目すべき点は、中原から避難の為に遷移した漢人の後裔である事、中華民族の揺り籠から離脱後に開放的な気風が出来た事だ。中国人共有の生存安全保障意識の他に、亜熱帯に在り南洋に近い環境も一因と思える全国平均以上の開放志向は、其の帰属意識と種族自覚の根幹を成すわけだ。

客家が最も集中する梅県は葉剣英の故郷だから、広東の孫文が辛亥革命を指導した事や、広西軍閥・李宗仁が蒋介石と互角に張り合った事、客家と言われる李登輝が国民党と台湾を変質させた事と併せて、現代史に於ける客家人・客家圏の役割の大きさが確認できる。鄧小平を客家人とする向きも多い(一例はソールズベリー『ニュー・エンペラー 毛沢東と鄧小平の中国』、37頁)が、客家語が出来なければ精々後裔と言うべきだろう。

娘・蕭榕(鄧榕。筆名=毛毛)は彼の伝記の中で、祖先を湖北からの移民や広東の客家とする俗説に触れ、何れにも否定的な立場を取った(毛毛著、長堀祐造訳『我が父・鄧小平 若き革命家の肖像』、48頁)。信憑性の高い其の記述に拠ると、鄧家の1世・鶴軒は江西省吉安の人で、明初の洪武13年(1380)に兵部員外郎として蜀に入り、以後の子孫は主に四川に在住し広東当にも赴任した(49～57頁)。

鄧一族は其の足跡に因って客家と見られようが、此の文脈で「客」の観念が重要だ。余所の土地に居住する事は「客居」「僑居」と言うが、「海外僑胞」「華僑」に対して国内移民は「海内僑胞」の概念も有り得る。春秋・戦国時代に多かった「客卿」(外国顧問)も、実質的には中華民族の内部の人材流動なのだ。今や上記の『辞海』の語釈の中の「客戸」は取引先の顧客の意に転じ、「客卿」も死語に化したが、中国人が外国や外地(国内の余所の土地)の顧問・専門家・

教練の招聘に違和感を持たぬのは、其の広義の「好客」（客好き）の伝統が根底に有る。

昨今、「海外軍団」と呼ばれる多くの元中国選手・監督が外国で活躍しているが、建国当初は逆に多くの華僑が共産党の仁徳を慕って帰国した。周恩来に水泳を教えた国家チームの若い女性選手もインドネシアから帰来した華僑だし、1960年代前半に世界女子卓球チャンピオンを獲った林慧卿選手も元在インドネシア華僑だから、華僑及び中の客家の活躍・寄与は実に大きい。

- 133) 詩作好きの点は他の数人の元帥と一緒にだが、葉劍英は其の世代の将帥の中で珍しくピアノを嗜み、娘婿・劉詩昆も著名なピアニスト。紅衛兵の悪戯で金鎚で手の指の骨が砕かされると噂された劉は、「文革」後期に再び舞台に戻ったので、真相は判らないが、長男が紅衛兵の迫害で永久に半身不随と成った鄧小平と同じ公私2面の「文革」嫌悪は、葉に有ったとしても不思議ではない。趙峻防・紀希晨『2月逆流』に拠ると、康生の意志と謝富治の命令で1967年に公安部が劉詩昆を逮捕したが、葉は「ソ連間諜」「反革命現行犯」等の罪名を記した逮捕状を破り棄てたものの、挑発に乗らず抗議も釈放の要求もしなかった（日本語版、126～127頁）。范碩『葉劍英在非正常時期 1966-1976』（華文出版社、2002年）に、江青等が葉の「罪状」を集める為に其の子女7人と女中を逮捕した、との記述が有る（232頁）。実名で記された4人には劉が無いが、長男・葉選平と婿・鄒家華は「文革」後、其々広東省省長 全国政治協商会議常務委員会第1副主席、副總理 全国人民代表大会常務委員会副委員長に成った。

『二月逆流』には、葉は京西賓館の会議で極左派と対決する際、テーブルを激しく叩いて手に血が出た、との場面も有る（138頁）が、掌の骨に腫が入ったのが定説である（同上范碩著書、156頁。他文献多数）。

猶、ピアノ好きの次世代指導者は他ならぬ江沢民。高新に拠れば、1989年5月末に彼が北京・中南海入りした後、上海に暫く止まった夫人・王冶坪は、上海市党委員会弁公庁（事務局）に特別に要請し、購入したばかりの 聶耳 印縦型ピアノを夫の処へ送らせた。夫が経験するだろう苦悩や圧力を好く承知した故に、夜静かに1人でピアノを弾いてストレスを発散する様にと心遣いからであった、との事。（高新著、田口佐紀子訳『中国高級幹部人脈・経歴事典』、講談社、2001年〔原典＝『中共権貴関係事典 高幹档案』、台湾・新新聞週刊、1993年〕、38頁）

件の聶耳は『義勇軍行進曲』（後に中華人民共和国国歌）の作曲家だから、江の余興にも政治的な色彩が多少染まるが、雲南出身で上海で活躍した聶耳が1935年にソ連に行く途中、準敵国の日本で水泳中に事故死した（享年23）のは、皮肉な巡り合わせだ。此の事象で2国の比較をすれば、日本共産党の志位和夫委員長が目につくが、彼もピアノが好きでストレス発散の手段に用いている。其が日本で意外な素顔と見られるのは、ピアノは西洋の資産階級文化の所産で共産党に似合わぬ、と言う固定観念の所為か。然し、ピアノと無縁の毛沢東も曾て、党委員会の指導者の芸当を「弾鋼琴」（ピアノを弾く事）に見立てた。

- 134) 広東人は国語を話さず、国語を話す余所者を相手にせぬか騙す傾向が有る、と韓文甫は言う（『鄧小平伝 革命篇』、40～41頁）。
- 135) 『辞海』の「域中」の語釈は、「宇内；天下。老子《道德経》：“域中有四大，而王居其一焉。” 駱賓王《代徐敬業討武氏檄》：“請看今日之域中，竟是誰家之天下。”
- 136) 「4大奇書」は古典小説の4大名作を指し、『西遊記』・『三国演義』・『水滸伝』・『金瓶梅』（或いは『紅樓夢』）等諸説が有るが、不統一ながら4に拘るのが中国的だ。
- 137) 1927年、『順天時報』が主催した全国規模の人気投票で、梅蘭芳・尚小雲・程硯秋・荀慧生が「4大名旦」に選ばれた。京劇の名優は清末の「同（治）光（緒）13絶」や「劇3鼎京甲（3傑）」、

清末民国初の「新劇3鼎甲(3傑)」等、奇数群も有ったが、民国初の「4大須生」(余叔岩・馬連良・言菊朋・高慶奎)や「新4大須生」(譚富英・楊宝森・奚嘯伯・馬連良)や「4大名旦」(「須生」も「旦」も京劇の役柄名)の様に、現代では4人組の方が親しまれる。

138) 中国人民銀行が1988年に発行した人民幣第4系列1980年版(発行の遅れは通貨膨脹への懸念に由る)の百元券(最大額面)に、毛沢東・周恩来・劉少奇・朱徳の肖像が描かれている。4大領袖の通常の序列 毛・劉・周・朱との微妙な出入りが興味を引くが、建国後1度もNo.2の地位に就かなかった周が、党の筆頭副主席・国家主席だった劉少奇の前に出るのは、民衆の間に毛以上の人気を博した事と共に、「文革」中に失脚した劉を上回る貢献度も要因に思える。曾て赤軍総司令として毛と並んだ朱徳も、建国後は半ば過去の人に化し色褪せに成ったわけだ。歴史人物に対する中国人の価値判断は、此の様に即物的な実績主義が実に強いが、本稿の論旨に即して我田引水の観方をすれば、件の構図は指導部頂点の長江上・中流から同中・下流への「重心移転」にも符合する。

139) 勝見洋一は『中国料理の迷宮』(講談社現代新書, 2000年)の中で、中国の4大料理は北京・広東・上海・四川として分類して説明される事が多いとした(28頁)一方、北京・上海・山東・広東料理を並列し(27頁)、山東料理を4大料理の1方と見做し(222頁)、詳細な講釈を行なった。中国側の文献と自らの見聞を多数盛り込んだ書物だけに、『広辞苑』の「中国料理」の規定よりも説得力が強いが、中国人の実感に近いながら四川料理の出番が余り無いのは、「4大」図式の限界が先ず感じられる。著書が言った通り、「実際には8大料理, 16大料理の分類も可能である(28頁)。同時に、定説の不在も要因に挙げられよう。

同書では料理を巡る各地方の中傷合戦にも言及した(226頁)が、定説の不在は其の張り合いにも帰せる。中傷合戦の代表例に挙げられた四川と広東、蘇州と杭州、山東と上海の対立(同上)も、掘り下げれば興味津々である。蘇州と杭州は「上有天堂, 下有蘇杭」(上に天国有り, 下に蘇州・杭州有る)と言う様に、俱に風光明媚な観光名勝地であるだけに、互いに相手のお株を奪う敵愾心も強かるう。四川と広東は料理の濃淡で大いに異なるが、首都に遠く離れた在野の立場に似合う野味が共通点だ。西南の四川・華南の広東の下方斜線軸は、東部沿海地域の北京・山東・上海の縦軸と対蹠を成す。

「文革」後の鄧小平・葉劍英は正に四川と広東の2極で、「文革」派の山東・上海「4人幫(組)」の失脚と併せれば象徴性を感じる。「文革」は山東料理と四川料理の一騎打ちだったと勝見洋一は言う(233頁)が、料理の流派を言う「幫」も其の派閥の意だから滋味の深い斬り方だ。蘇州・杭州料理が上海料理に併合され事(27頁)や、南下中共軍の占領に伴う上海料理の山東化(224頁)、北京料理に於ける山東料理の内包(27頁)は、中国の対立・統一の縮図に見える。

勝見洋一が指摘した通り、北京料理も上海料理も元々は独自性が無く、周辺地域の料理の特色を吸収した物だ(224頁)。其の「中空」「雑色」性は中華文化の祖型にも通じるが、上海料理を蘇州・杭州・揚州・無錫・寧波料理の結晶体とした観方(224頁)は、寧波料理に親しんだ蒋介石と同じ広域の淮(淮河流域の安徽・江蘇北部)・揚(揚州)料理に親しんだ周恩来・江沢民との同根性を浮き彫りにする。中共建国の際の国宴で周恩来の演出で江蘇料理が基調と成った一幕も、南京から北京への遷都と併せ考えれば国・共の同根性を益々感じる。

其の意表を衝く演出には勝見洋一の講釈の通り、材料の確保で江南への支配力を誇示する意図や、中共指導者に多い南方人が自分の土俵で勝負したい心理が見え隠れする(『中国料理の迷宮』, 168~169頁)。前者は中国古来の「坐北制南」(北に鎮座し南を制す)の統治様式に通じ、後者は

建国初年の党中央のスターリンへの誕生日贈り物の第1候補として江青が山東の白菜・葱・大根を提案した事（師哲・李海文『毛沢東側近回想録』、266～267頁）にも裏付けられる。一方、周恩来が毛沢東の家郷への配慮からか、得意中の得意なる「紅焼獅子頭」（「最」の形容を滅多に使わぬ彼は、此の1品を自分の「最拿手的菜」[最も得意な料理]とした。『中国料理の迷宮』、174頁）を建国国宴に出し、且つ其を湖南風に改編した事は、南・北競合と交差する南・南カルチャー・ギャップ「文化溝」を示現させた。江蘇を主体とし湖南を加味した其の采配は謀らずも、建国半世紀後の党領袖と政府首脳を組み合わせと主従関係を予見した妙が有る。

勝見洋一が四川料理の定評を尊重しつつ山東料理に傾いたのは、激辛を敬遠する日本人の感覚の反映とも思えるが、其の2方とも個人的に好む本稿筆者の私見では、4大料理に文句無く入るのは北京・上海（含む江蘇・浙江）・広東の3派で、残りの方は北京・上海の2方に融合した山東料理よりも、東部沿海や珠江流域の此等4派とも鮮明に異なる四川料理が代表格の1角を成す方が、地域のカバー率や中国の複雑系の多彩の体現に於いても好ましい。1970年代の山東閩と鄧小平の死闘及び後者の勝利は、此の視角から眺めても示唆的だ。

勿論、山東料理の重みも看過できない。勝見洋一は毛・周等が最眞にした名店 豊沢園 を典型に、北京に於ける山東料理の根強い人気を紹介した（208～219頁）が、毛の邸宅の名も乾隆帝の揮毫に由る「豊沢園」である事に気付かされた。山東料理の求心力は、山東の地の利と儒教の教祖の生地に対応しい文化の高さの証だ。周恩来の遺骨が北京・天津の他に山東省の黄河河口に撒かれた事も、ヘリコプターの飛行半径（多くの回想録に出た此の3ヶ所はほぼ同じ直線に位置し、中間の天津は起点・終点の2地とほぼ等距離）や、中華民族の揺り籠への帰属意識を考えれば自然な帰着だ。

猶、ウィルソンは「周は台湾さえも忘れず、灰の一部が台湾海峡にも撒かれた」と述べた（『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』、315頁）が、対台湾の懐柔に腐心する中国側の文献には見当らぬ。代りに、周の祖国統一の宿願を考慮して遺骨が散骨の前夜に人民大会堂の台湾庁（台湾の間）に安置された、との証言が有る（顧保孜『紅牆里的瞬間』、解放軍文芸出版社、1992年、270頁）。全国各地に1間ずつ割り当てた人民大会堂の配置の政治的な象徴性を思い知らせる此の事実は、遺骨が台湾海峡まで届かなかった事の裏返しだ。

ジャーナリストや中国研究専門誌の編集者を長年務めた割には、ウィルソンの此の記述は出所の明記も無いので信憑性が低い。此の件が入った「エピローグ」の参考文献は主に、「周恩来死後の最も信用の置ける目撃者の記述」として、Roger Garside著“Coming Alive, China After Mao”（Deutsch, London, 1981）が挙げられた（330頁）が、中国・中国語の圏外に身を置く英国人と論考対象との巨大な距離、外側の観察者と内側の当事者との間の本質的な情報格差を感じずにはいられぬ。対して、実際に散骨を執行した周恩来のスタッフの回想録（南山・南哲主編『周恩来生平』、1589～1593頁。原典＝高振普『最後の使命』）は、当然ながら時間や経路が正確な上で、高空の寒さに震えた等の細部まで臨場感が強い。

尤も、もつと圈内の当事者の証言も鵜呑みには出来まい。例えば、周逝去後の新華社通信の公式発表の「撒在祖國的江河大地上」が脳裏に刻み込まれており、散骨の執行者の回想にも湖や海が出ていない故、ウィルソンの「最後に行なわれたのは周の遺言に従って、遺灰を中国中の川、湖、海、陸地の上に撒く事だった」（315頁）に引っかかったが、精査した処、数多くの齟齬にぶつかってしま了った。例えば、上記の高振普『最後の使命』の抜粋で構成した『周恩来生平』の最終章の表題は『骨灰撒向江河大海』（1589頁）だが、文中に「江河大地」の表現も有る（1592頁）。別の証言

に基づいた同じ『周恩来生平』の前の章には、周恩来の希望の散骨先は「祖國的太好（＝素晴らしい）河山」（1585頁）とされた。一方、顧保孜『紅牆里的瞬間』では「山川江河」（271頁）と言い、李克菲・彭東海『秘密專機上的領袖們』（中共中央党校出版社，1997年）に至っては、「祖國的江河湖泊，高山深谷之中」（206頁）と大幅に飛躍した。

此等の回想録は作家が取材に基づいて構成した物が多いので、「筆下生花」（筆の下に花が咲く。文章の素晴らしさを誉めるか、逆に文章の誇張を皮肉る比喻）の通り、事実より奇抜を狙う表現心理から想像を逞しく膨らませ、言辞に華麗な虚飾を加える事も有ったろう。斯くして歴史の証言は当事者の思い入れや言葉の綾の独り歩きに因り、時間が経過し記録経路が複雑なほど変形し易い。但し、小異を超えて大同を求めるなら、上記の散骨先の記述が全て4字熟語を用い、対の発想の枠内に在る事に気付く。8字の「江河湖泊，高山深谷」は、「江・河」「湖」「山」「谷」の敷衍で、此の4組は更に「江湖」「山谷」の対に収斂できる。此の派生を観ても判る様に、上記の勝見洋一の「4大料理」「8大料理」「16大料理」は、中国的な発想の回路に沿った推論だ。新華社通信が言った「江河大地」も、陰陽5行の中で相克関係に在る水・土の2元から成る。水の有る処に撒くのを夫人が望んだ事も有って、党中央が決めた北京・密雲水庫（貯水池）と山東の「黄河入海処」（黄河が海に入る処）は、一応湖，江河，海と解釈できるから、上記の表現は撞着し合いながらも全て許容の範囲内だ。

其にしても、関連文献には大雑把さや杜撰さが目に余る。例えば、『周恩来生平』の『骨灰撒向江河大海』は、散骨の飛行機が1月12日に飛び立つ場面から始まり、後半に4時間半の飛行を終えて16日0時45分頃に任務完遂と記された。1回限りの飛行だから3日間ものブレも生じたし、周の遺骨は15日の追悼会の後に撒かれたのが、同章の後半でも言及された事実だ。冒頭の上記部分の直ぐ後に、12日に周恩来夫人が高振普等たちに散骨先の調査を依頼する場面が出たが、編集の際に原作の此の導入部の時間を本番の時間と混同したとしか思えない。

此処で浮上した問題点は第1、事実の確認や表現の整合性に鷹揚な国民性だ。曾て周恩来から「49 + 3 = ?」と問われた秘書は、困惑しながら「当然52です」と答えたが、周は空かさず相手が作成した統計を示し、此処では何故53と成ったのかと詰問した（程華『周恩来和他的秘書們』，206頁）。交渉相手のソ連政府に渡す資料で3重の点検がされた物なので、「数拠」（データ）に対する不注意も甚だしい。周の秘書もこんな有様だから、平均的な水準は推して知るべし。

第2、原作者の点検が無かったのも一因に思える。此の本の場合はさて置き、昨今の中国では恣意の改編が多過ぎる。『秘密專機上的領袖們』も『武漢晚報』での連載を経て、1992年全国都市新聞連載作品特等賞を獲った後、全国の20数紙・誌に転載されたが、著者は単行本の序文で、『版權法』の制定にも拘らず、「3不」（著者に謝礼を出さず、出版物を送らず、著者の名前を明記せず）主義が横行して止まぬ実態を嘆いた（4～5頁）。

もう1例を挙げると、青野・方雷著『鄧小平在1976』上巻『天安門事件』（春風文芸出版社，1993年）の記述（31～32頁）は、操縦士の実名（胥從煥）まで出し、北京・通遼の空港とソ連製安（アントノフ）-2小型飛行機を使い、飛行時間が4時間半に及んだ点も他の文献と一致するが、開始時間を16日未明とした点や、北京 ジープで市内から駆け付けた6人の軍人が周の遺骨を一部ずつ持って搭載した件は、上記の高振普説と食い違う。信憑性の高い後者に拠ると、立会いの夫人・鄧穎超が其の秘書・医師・看護婦の付き添いで、周恩来愛用のソ連製（ジム）自動車で、夜8時過ぎに通遼空港に到着し、同行の周の護衛・高振普と張樹迎が飛行機に乗り散骨を執行したのだ。張佐良『周恩来的最後10年』（上海文化出版社，1997年）に拠ると、

遺骨は3つの袋に分けられた（早坂義征訳『周恩来・最後の10年 ある主治医の回想録』、日本経済新聞社、1999年、306頁）。

周が部下の報告で一番苛立ったのは「大概」（多分）の類いだ（『周総理和他的秘書們』、59頁）が、彼の同郷・魯迅も貶した国民性の「馬馬虎虎」（いい加減）は、上記の事象にも感じ取れる。此の熟語の見立てと成る2種類の大柄な動物は、其の気質の拙速・横柄の処を言い得て妙だが、周恩来にも影響を与えた中国の演義小説の大雑把・誇張も背景に有ろう。但し、註145で紀実小説・『鄧小平在1976』に投げ掛けた疑念とも関わるが、左様な粗忽は自ら信頼性を下げるのだ。

山東料理に絡んで周恩来の散骨先を引き合いに出し、其の史実や講釈や関連文献に就いての論評で寄り道をしてしまったが、新出文献を以て此の註の主旨に戻ろう。李克菲・彭東海『秘密專機上の領袖們』に拠ると、毛沢東は地方視察で好く各地の首長から「地方風味菜」（地域の特色を持つ料理）で接待されたが、彼は誉めもせず貶しもしなかった（11頁）。昭和天皇が決して好きな相撲力士やテレビ番組の名を明かさなかったのと同様に、公平を常に重んじねば成らぬ君主の風格と宿命が感じられるが、権威有る筋ほど料理の善悪、格付けに口を嚙むのは良識とも言える。尤も、毛は「内賓」（国内の賓客）を自宅に招待する時、何時も家郷（湖南）料理を出した様だから、他郷と一線を劃す距離も一因に考え得る。

140) 『辞海』には何故か「満漢全席」の項は無いが、勝見洋一『中国料理の迷宮』でも言及された様に、当初は漢族官吏が満族官吏を接待する為に考案された宴席で、後に乾隆帝の揚州巡幸の頃「北菜・南菜」（満・漢族の得意な料理）各54品、満族の点心44種が加わる形に定着した（87頁）。

本稿の論旨に即して言えば、中華料理の贅沢さの表徴たる満漢全席は、先ず国内の民族の対立・融合の産物と取れる。料理数の合計 108は梁山泊好漢の人数と妙に吻合するが、此の主たる部分の双方の完全対等と食後のお負の部類での漢族の負けは、競合の2民族の文化と統治に於ける其々の優劣に合う微妙な^{バランス}均衡を感じさせる。猶、満族王朝が廃れた後も名称が満・漢の順の儘^{まま}でいる事は、数量の多寡を思えば妙に納得が行くが、声調順（「満」は第3声、「漢」は第4声）も要因だとすれば、食・言に跨がる口の重要性は改めて認識させられる。

141) 註122文献、35頁。

142) 梁啓超『中国地理大勢論』（中華書局、1926年）、註122文献、36頁より。

143) 『辞海』の「中原」の解に拠ると、「中原」は辺境地帯の対概念として、狭義的には今の河南省辺りを指す。先秦時代に既に維し（今の河南省・洛陽）と陶たう（今の山東省・定陶）が天下の中心だとする観方が有り、華夏族の活動範囲が拡大した後も、古豫州は依然として9州の中央の中州（中原）と見做された。広義の「中原」は黄河の中・下流域か、黄河流域全体を指し、南北分裂の時代では好く此を「江東」の対概念に使っていた、と言う。

144) 「我荣幸地以中華民族一員の資格、而成為世界公民。我是中国人民的兒子。我深情的愛著我的祖国和人民。」（原典不詳。韓文甫『鄧小平伝 治国篇』、627頁より。猶、文中の「深情的愛著」は大陸の表記では「深情地愛著」と成る。）

145) 毛・鄧は1976、89年の天安門事件で武力鎮圧を決断したが、周・葉には左様な真似は出来まい。青野・方雷著『鄧小平在1976』上巻『天安門事件』に拠れば、毛は天安門広場で群衆が公安警察と衝突し車に放火したとの報告を聞いて、「階級闘争は元より民主に拘る事は無い。蒋介石も我々に民主を与えず、我々の人を沢山殺したから、我々も彼の人を殺し返した。其の人の道を以て其の人の身に返すのだ」「君子は口も使うし手も出す」と述べて、武力行使を許可した、と言う（218～219頁）。「文革」後期に毛の寵愛を一身に集めた秘書・張玉鳳の回想では、何故こんな

素晴らしい周総理を後継者にしないかと彼女が訊くと、毛は刀で斬り落とす仕草を1回して、「総理は好いのは好いが、此が足りない」と答えた(48頁)。周恩来逝去後の後任総理に就いても彼は、李先念を「好いのだが、軟弱過ぎる、温和派」と否定した(34~35頁)。

中国側の大量な文献を基に構成した『毛沢東秘録』(産経新聞「毛沢東秘録」取材班、産経新聞社、1999年)にも出た史実だが、1968年7月27日、毛の指示で首都労働者・解放軍「毛沢東思想宣伝隊」約1万人が清華大学への進駐を試み、紅衛兵組織の武装抵抗で5人が死亡し数百人が負傷した。毛は緊急に首都紅衛兵の「5大領袖」を召集し、紅衛兵を鎮圧した「黒手」(黒幕)ば自分だと啖呵を切り、武闘を直ちに止めるよう厳命した。激昂の彼は腕を振り上げるとどすんと振り下ろし、其でも頑固に抵抗を続けるのなら殲滅する、と声を荒げた。(下、56~59頁)

目下の多くの中共指導者の出身校が3分の1世紀前に左様な形で全国の台風の目と成った事は、歴史の走馬灯の目まぐるしさと「^{ホット・ポイント}熱点」の1極集中の習性を物語っている。「占領上層建築」(上部構造占拠)に挑む労働者・軍人は敢えて武器の使用を自粛したが、毛の警告の仕草は真剣を抜いて斬り付ける真剣味が有った。因みに、清華の「清」は天安門事件の際の「清場」(広場の清掃・整除)の様に、肅清の殺気を秘めた語彙でもある。林彪事件後の毛が先ず王洪文、続いて華国鋒を後継者に選んだのは、2人が其々上海労働者造反総司令部総指揮と公安相として、反対勢力を弾圧する実績・度胸が証明済みだとの要素も有ろう。

『毛沢東秘録』では出所が明記された(例えば、上記の場面は李健編著『紅船交響曲』[中共党史出版社、1998年]、陳長江[毛の警備聯隊長]等著『毛沢東の最後の10年』[中共中央党校出版社、1998年]に拠る)が、紀実小説・『崛起』之3『鄧小平在1976』は、出所が全て不明の儘だから信憑性は未知数だ。此の手の紀実小説の受け止め方として、毛沢東や其の時代の格言の通り、「不可不信、不可全信」(全く信用しないのも駄目、全て信用するのも駄目)、「与其信其無、不如信其有」(無いと思うよりも、有ると思うべきだ)が宜しい。

少なくとも、張玉鳳の回想と断った上で引いた毛の周恩来評は、出所不明を形式上の不備として目を瞑り信用して能い。台湾問題で米国に複数の選択肢を提示した周に業を煮やし、毛が1973年に猛烈な批判を執拗に加えた一齣も、傍証に挙げられよう。「台湾を流血の地にする事を望まない」と言う周が1年前に米国在住の台湾華商代表団に表明した見解を念頭に、毛は「内戦が恐い? 攻撃の必要があれば攻撃するだけだ」と放言し(『毛沢東秘録』、下、226頁)、強硬姿勢を顕わにした。周が反省を繰り返した末に漸く放免された其の「軟弱外交」は、他ならぬ葉剣英と共にキッシンジャーと会談した時の出来事だ。註130で劉少奇夫人・王光美の英語堪能に触れたが、抗日戦争後の米国に由る国・共軍事調停で彼女が通訳を務めた中共代表団は、他ならぬ周・葉が責任者である。劉少奇夫妻の打倒を命じた毛が周・葉に距離を感じたのは、別に不思議ではない。後任総理の候補として毛の眼鏡に適わなかった李先念は、其の際に毛の進りを食った葉の推薦だから、対象外として一蹴されたのは当り前の成り行きだ。

毛に「君子動口也動手」と茶化された元の格言は、「君子動口不動手」(君子は口を使うが手は出さぬ[言葉・論理に訴えるが腕力に訴えぬ])と言う。歴史はifの仮説を許さないから、周と葉が其々第1次、第2次天安門事件の際に生きていたなら武力鎮圧に同調したか否かは何とも言えぬ。1989年に徐向前・聶榮臻元帥が軍の発砲に反対し、逆に李先念と鄧穎超(周恩来夫人)が弾圧側に回った事を考えても、人心は天のみぞ知る。但し、「文革」中に周は乱麻を快刀で斬らず忍耐強く解し続けた事や、国防省への闖入を試みる紅衛兵に対して発砲も辞さぬ姿勢を示した一方、「人民内部矛盾(対立)」に寛容で民衆に優しい葉の姿から推断すれば、本物の「君子」の

部類に入れて間違い無い。

中国語の「軟弱・無力」や「天真」（無邪気。無防備）で対応する日本語の「甘い」から、辛党・毛と甘党・周の対極が連想される。勝見洋一の『中国料理の迷宮』にも、唐辛子の辛味が好きな毛と対照的に、「腹が空いたら砂糖も好い食べ物に成る」と言う周の感覚や、朝鮮戦争中に彼が激務の精神的緊張を解消すべく、自ら厨房を訪れ料理人に好物の「冰糖肘子」を作らせた（材料・作り方も日本人に馴染みの無い此の料理は、「冰糖入り豚の骨付き肉の炒め物」と解されたが、同じ「肘子」を好む上海出身の本稿筆者の固定観念では、炒め料理ならぬ「清炖」[醬油抜きの煮込み]が思い浮かぶ）との逸話が紹介された（175頁）が、周知の通り江南料理の特徴には甘味が有る。

「激辛好きの毛＝鷹派」「甘味好きの周＝鳩派」の図式が成り立つなら、味覚を原点とする生理的な感覚の人間性・社会性への影響の論拠に成るが、人間と言う名の複雑系は簡単に割り切れない。何しろ、「資産階級自由化」や学生運動に対する「軟弱」で鄧小平の不興を買った胡耀邦も、民衆への武力行使に否定的な朱鎔基も、毛の同郷なのである。唐家璇外相は国内で一部「軟弱外交」の誹りを受けた様だが、鄧の賞讃を得た前任の銭其琛と同じ上海の人だから、地域差は余り関係が無い。アイスクリームに茅台酒を数滴掛けて食べる独特の流儀（程華『周恩来和他的秘書們』、230頁）が象徴する様に、周は甘・辛の2面を持ち併せた。筆者が少年時代を過ごした「文革」中の上海では、「酒心巧克力」（リキュール入りチョコレート）が流行っていたが、振り返れば「陰陽魚」の哲学さえ感じる。

逆に、辛党・毛は甘党を包容する一面も有った。彼は71歳誕生日の内輪の小宴で、傍に坐らせた山西の陳永貴等が激辛に慣れぬ恐れを承知で湖南料理を出した一方、客の着席と共に煙草と飴を勧めた（吳思『陳永貴沈浮中南海』、花城出版社、1993年、7頁）。米中国交正常化の交渉の為に訪中した米政府高官が泊まる国賓館の部屋に置いた飴が毎日「蒸発」しているとの報告を受けて、彼は全国最高級の上海製 大白兔 飴を1人5キロずつ贈るよう指示し相手を喜ばせた（陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』、崑崙出版社、1988年、269頁）。

勝見洋一は上海料理の甘味に絡んで、「甘い物は高級」とは農民の感覚だと喝破した（『中国料理の迷宮』、227頁）。毛が上海製の飴を米国人の接待に使った一幕は、田舎出身の毛と田舎から国際都市や超大国に成り上がった上海と米国の類通を思えば面白い。他方、来客に飴を勧める毛沢東時代の習慣も上記文献の触発で思い起したが、今や其がほぼ消えたのは感覚の洗練化と言うよりも、肉や卵、油等の配給制の廃止に伴って栄養代用品としての飴の出番が無くなった事だ。

146) 所謂「3国4方」を擬った本稿筆者の造語。林彪・「4人組」裁判（1980年）の起訴状に拠れば、1971年3月31日夜から翌日未明に掛けて、林彪の息子・林立果（空軍作戦部副部長）が上海で、江騰蛟（南京軍区空軍政治委員）・周建平（同副司令）・王維国（空4軍政治委員）・陳勵耘（空5軍政治委員）を集めて、政変計画の役割分担を決め、王、陳、周を其々の駐在地 上海、杭州、南京の責任者とし、江を総責任者とした。インドシナ3国4方会議（同年4月に広州で開催された北越・南越民族解放戦線・ラオス・カンボジアの首脳会議）に因んだ江の命名で、「3国4方会議」と呼ばれた。

此の名称で興味深いのは、同じ南京（華東広域）軍区に属する4人の当事者たちは其々1国1城の主と自任し、俱に同司令部の江・周は「2方」と計上された事だ。本稿の論旨に関して言えば、長江三角洲の江蘇・浙江・上海の「3国」は、同地域の呉が一角と成った古代の三国と結び付ければ面白い。中国は国の中に独立王国が有り、現代史は『三国演義』の延長・変種の観が強

いが、此の挿話も些細な表徴に成ろう。

一介の少将に過ぎず党内の序列が中央委員候補の王・陳以下だった江は其の裁判で、林彪の「4大金剛」(4天王) 俱に党中央政治局委員だった黄永勝(総参謀長, 上将)・呉法憲(空軍司令, 中将)・李作鵬(海軍政治委員, 中将)・邱会作(軍総後勤部長, 中将)と並んで、林彪集団の軍人5主犯の1人とされ、黄と同じ懲役18年の刑罰も呉・李の17年、邱の16年を上回った。毛沢東暗殺に関わったとの罪名が主な要因に思えるが、軍関係の作家・張聶爾著『中国1971 9.13風雲』(解放軍文芸出版社, 1999年)で明らかと成った釈放後の陳・周等の証言は、其の集まりは実は当事者たちの感情・利害の対立の調整が目的で、共同作戦会議云々は紙上の虚構に過ぎないと言う(笠井孝之『毛沢東と林彪 文革の謎 林彪事件に迫る』, 296~303頁)。

其の会合終了の日は西洋で「4月馬鹿」(中国語訳は「愚人節」)だが、氣宇壮大な当意即妙を發した江が馬鹿を見たのは、中国人好みの気取りの大言癖の命取りに成りかねぬ危険性、及び中国の「初めに言葉有りき」の伝統を思い知らせる。呉法憲が法廷での偽証を告白した(図們[林彪・「4人組」裁判の副裁判長]・肖思科『震撼世界的77天』[中共中央党校出版社, 1995年]・笠井孝之『毛沢東と林彪』, 42頁より)等、初めに有った図式や言葉で紡ぎ出された領袖暗殺・武装政変の真偽はともかく、此的一幕では江騰蛟の運命に注目したい。

毛沢東の不評で昇進の道が閉ざされた上で、軍事法廷で実力以上の「特殊待遇」を受けた彼は、最も不運な軍幹部の1人に挙げられるが、毛の「此人不得重用」(此の人は重用しては成らぬ)の指示にも拘らず、林彪に重用されたのは、氣配りの芸当に負う処が大きい様だ。曾て林彪夫人・葉群が「農村社会主義教育運動」に参加する際、皆と同じ肉料理の乏しい食事を強いられた時、彼はこっそりとご飯の底に鶏の腿肉(大衆料理の贅沢品)を埋めて差し入れ歓心を買った、と言う。尤も、其の抜擢は後の失脚を招いたので、やはり禍福は糾える縄の如し。

此の話は4要諦図の「下半球」の礼・利の相互転換の可能性を示唆するが、「右半球」の力・利に絡んだ次の証言も吟味の価値が有る。上記裁判で懲役10年を食った元空軍作戦部部長・魯珉は「3国4方会議」の背景として、南京空軍、空4軍、空5軍の齟齬を披露した。「江騰蛟は空4軍政治委員当時に“林彪は出費が高み、林彪・葉群夫妻だけの給料では不十分だから、4軍で林彪に資金を融通してやってくれ”と上層から言われ、毎年5千元を林彪に渡していた。江騰蛟が南空政治委員に転出し、王維国が引き継いだ後も、葉群が薬を買う等と言う時は、何時も空4軍が金を出していた。然し或る種の薬は外貨兌換券(外匯)が必要だ。空4軍は外匯を持たない。上海市革命委に王国維名義で取得を要求しなければ成らない。王は困って、1度は支出を断った。江への補助も差し止めた。王は空軍司令の呉法憲に、林彪への支出はどうすべきかを訊ねたが、呉は林彪の処が要る物は提供してやれば好いと答えた。江は王を恨んで、引きずり下ろそうと考えた。」(笠井孝之『毛沢東と林彪』, 301頁。原典 = 上記張聶爾著書)

此の逸話で興味深いのは先ず、天下の林彪夫妻もみみっちい裏金作りの必要が有った事だ。毛沢東時代では貧富の格差を縮める為に、党・政府の要人の給与は低く抑えられたが、諸々の便宜が得られる特権に因り実質給与は遥かに高い。其の力・利の転化は本稿の4要諦図の右半分の黒地・白抜き(イメージ)の形象に因んで言えば、李登輝時代まで残っていた国民党の「黒金」(黒社会[暗黒街。極道]との癒着、不明朗な金脈)とは別の「黒金」の間に気付く。此の「黒」は出稼ぎや無計画出産に因る不法滞在者・無戸籍者を言う俗語の「黒戸口」「黒人」「黒孩子」の様に、闇・地下・非合法の意である。先進国でも地下経済の規模が国民総生産の数%を占める等、「水至清、

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

無大魚」の逆説も世の中の現実や常識と成るが、陰陽哲学の複眼で眺めれば裏の裏も目に付く。「文革」後に民衆が体制に不信感を深めたのは、此の絡繰が暴かれた事も一因だが、更に一皮剥けば、清濁合わせた池の中の「大魚」も全て、「自来水」（水道水）並みに無尽蔵の財源に恵まれるわけではないので、酸欠病ならぬ金欠状態に陥る事も儘有ろう。

註62で毛沢東の謝恩・喜捨の尽きぬ財源 原稿料に焦点を当てたが、彼の71歳誕生日祝宴の挿話（呉思『陳永貴沈浮中南海』、7頁）に、其の2面性が垣間見られる。彼は建国後に自分も含む党の指導者の為の誕生日祝いを禁じた為、「文革」後に明らかと成った自らの「祝寿」の事実は、神話の崩壊にも多少繋がった。尤も、其の何れの祝宴は極く内輪で、而も生への執着が強まった70歳代の場合が多いので、人間性を疑う程の不信は生じまい。件の1964年12月26日の祝宴は第3期全国人民代表大会の開催中に当り、其の1ヵ月後に彼は劉少奇打倒を秘から決意したから、公安・警備部門の責任者（軍総参謀長・羅瑞卿、公安相・謝富治、中央弁公庁主任・汪東興）や中国の「原子爆弾の父」・銭学森、数人の「全国労働模範」なる農民を主賓席に就かせた其の宴は、安全を確保した上で威力を顕示し、「以農村包圍城市」（農村を以て都市を包圍する）戦法で思想闘争を仕掛ける前奏曲と思えよう。紅衛兵は彼の「革命不是請客吃飯」（革命は招宴ではない）云々を信奉したが、招宴も革命の一環と成り得る。

共産党中国の不惑の歳までの激しい浮沈を映す様に、同席者の中で羅瑞卿は「文革」の最初の標的とされ、陶铸（党の中南局・広東省第1書記）は遠交近攻で一躍No.4に抜擢され又直ぐ下ろされ、後に中央政治局入りした謝富治・汪東興・陳永貴（山西省昔陽県大寨人民公社党支部書記）も「文革」後に失脚した。銭学森が例外的に名誉を失わずに済んだ事は、周恩来が全人代で提起した「4個現代化」に於ける国防の近代化と科学・技術の近代化の重要性や、「文革」中に否定された「知識就是力量」（知識は力なり）の正しさを立証した。さて置き、席上毛は珍しく茅台酒を3杯飲んで、「銭学森不要稿費、私事不坐公車、這很好！」（銭学森は原稿料を取らず、私用で公の車を使わない。此は大変好い！）と激賞した。私心に克てと言う「文革」時代の毛の呼び掛けを先取りした発言だが、原稿料が「資産階級の権利」として廃止された「文革」中、全国で彼1人だけ原稿料を貰い続けた。中国人は「酒後吐真言」（酒の後に人間は本音を吐く）と言うが、論理性を薄める酒の危険性にも此処で気付かれる。原稿料の廃止は「文革」前の'65年から11年も続いたが、主席の酒席上の1言が発端だとすれば言語道断である。

1回で数千、数万元に上る夫人の小遣いの要求に毛が応じた話は、「私房錢」（臍繰り）や「自留錢」（彼が禁じた「自留地」[農業協同制の下での一部限定の農民自家用農地]を擬った本稿筆者の造語）の確保の必要性を裏付ける。江青が大金をねだった使途は道楽の写真や、毛死後の生活保障等と伝えられた。前者は贅沢と言えば其までであるが、支払い方の吝嗇ぶり（楊銀禄『江青の真実』、66～70頁）から、中央首長の特権も無限大ではない実態（奢ると言ってスタッフたちを食事に招いた後に食糧配給券を徴収した一餉は情理に逸れながら、全ての人が配給制限の枠内に在った事を示す）、其の老後の心配も杞憂でない境遇等が判る。

最近の某高官が汚職で逮捕された後、周恩来の秘書を務めた父親を養う為に金が要ると弁解した、と言う噂が巷に流れている。社会全体の生活水準の向上、欲望の膨脹と老人福祉保障の低下、公務員給与の少なさを考えれば、真偽はともかく同情を誘い易い話ではある。周恩来も曾て役人の父親を追憶した時、「父親が賄賂を取っていたに違いないとも言い、“賄賂を取らなければ長衣（支配階級の男子の着る上衣）や家を買う金など無かったはずだ”と認めている。」（ウィルソン『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』、2頁）

懐が不如意ながら実際の支出を惜しまなかった父親の見栄っ張りを周は酷評したが、使途の衣・住の装い・構えは俱に面子に関わるので、其の収賄は善悪を超えて、人脈を重視する価値観と共に中国社会の情理に適う。林彪夫妻の金銭面の欲求にも恐らく、交際費が大きな比重を占めたのだろう。何しろ人心収攬を言う中国語は、字面に買収が出る「収買人心」だ。但し、露骨な金配りに関しては、日本自民党派閥領袖の「軍資金」提供や「餅代」配布の方が凄い。石川達三の小説・『金環蝕』(1966年)に拠る映画(監督=山本薩夫。1975年)が「文革」直後の中国で上映された際、実在の九頭竜川ダム建設汚職事件(未摘発)を基にした作中の首相・閣僚の腐敗ぶりは、近代化の手本・日本への憧れに水を注す程の衝撃を観客に与えた。翻って思えば、当時の中国の相対的な清廉さの証と取れる。

毛沢東時代では横領の死刑判決の目処は1万円程度だったが、其の千倍、万倍にも上る昨今の汚職の横行は、通貨膨脹に因る貨幣の目減りを考慮しても隔世の観が強い。其の時代でも行政の厳禁に拘らず、「小金庫」(企業等が国家に上納せず内部蓄積に回す裏金)や「両本帳」(2重帳簿)は陰で存在していたが、林彪・「4人組」摘発の際に不正蓄財の話は余り出なかった。営利目的の誘拐犯罪も聞かず其を裁く法律も無かった事は、全民低所得の故に身代金が期待できぬ事情が大きいが、「4人組」が意地で唱えた「窮乏の社会主義」は現実其の物だ。泡沫経済崩壊後の日本では心の均衡を望む大衆心理も有って「清貧」論が流行ったが、中国語の「清」は「綺麗さっぱり」の意も有るから、毛沢東時代の清貧は高邁な志に由る部分と、無い袖は振れぬ故の部分が混じり合ったのだ。同じ様態を表わす副詞の「浄」「光」は、其の頃の「清純」「光明」の裏面を映し出す。

葉群の逼迫状態の中身も興味を引くが、林彪一味がソ連へ亡命する際に人民元・米ドルを一部持ち出した事と合わせて、外貨不足の実態が先ず浮かび上がる。「文革」後に一部の要人や其の子女の海外秘密口座の噂が取り沙汰されたが、部下に当座の外貨を調達させた林夫妻には其は無かつたろう。使途の薬品購入も林が健康法の実践と漢方薬名を写してベッドの^{フランス}壁に貼り付けた事実と共に、彼等の長生願望を覗かせる。曾て林彪に曹操の詩・『龜雖寿』を揮毫して贈り養生を勧めた毛沢東は、自らが長寿祈願を込めて71歳誕生日を祝った1964年に、保健の仕事で修正主義と断じ党中央保健局をソ連の真似として撤廃させ、代りに中央首長の健康管理・治療を担当する部署が北京医院内で出来た時も、毛が「保健」の名を嫌った故に「総值班室」(総当直室)と称した(程華『周恩来和他的秘書們』, 517~518頁)が、健康維持に掛ける中共の要人たちの関心は衰えまい。

胡耀邦元総書記は「天安門事件」直前の政治局会議で不正を糾弾し、海外に口座を持たぬ指導者は自分と鄧穎超だけだと断じた、と言う風説が有る。真偽はともかく、周恩来夫人は其ほど特別な存在だ。其の彼女の母親は漢方医であり、赤軍総司令部で医者を務めた事が有り(南山・南哲主編『周恩来生平』, 530頁)、彼女自身も結核や腎臓病等の持病を抱えた^{せい}所為で健康に人1倍に気を遣っていた。中国では恥部の露出を潔しとせぬ意識から、日本の「私小説」に好く見かける闘病記は従来少ないが、毛沢東時代で特に珍しかった闘病記には、鄧穎超の『以革命的意志戰勝疾病』(革命的意志を以て疾病に打ち勝つむ)が有る。本稿筆者は元検事総長・伊藤栄樹の『人は死ねばゴミに成る 私の癌との闘い』(新潮社, 1988年)を読んで、人工肛門を付けた等の闘病生活の赤裸々な描出に強い違和感を覚えたが、小さい頃に自宅に有った此の薄い本(発行先は人民衛生出版社か。出版年代も失念)が思い出されて考え直した。

周恩来の最後の主治医を10年間務めた張佐良が1965年に赴任の時、鄧穎超から健身養生の

書・『八段錦』が贈られた（程華『周恩来和他的秘書們』、519頁）。一種の気功なる健康法「八段錦」は「文革」後期に都市部で流行ったが、「文革」前の指導部に源が遡れるのは愉快な話だ。江沢民時代に「法輪功」が中共黨員数と比肩する一大勢力に成ったのも、大衆が意識形態より健康法に飛び込み、上層部にも流行の健康法の受益者が居た点で、其の4半世紀前の歴史の再演と言える。更に言うなら、医療保険の国家負担率の下降、自己負担率の上昇の中で出費軽減の代替手段を求める風潮や、一般人も党幹部も外貨貯金に興味を持ち、軍隊が営利に精を出す傾向は、中国人の伝統的な保健・保険・財成観念の延長線に在りながら、「文革」中の「副統帥」夫妻の俗人的な欲求・行動にも通じる。

毛沢東は「文革」中、知識青年は農村に行って貧農、下・中層農民の再教育を受けるべし、と呼び掛けた。闘争対象の地主・富農に対する「貧下中農」の名称は、「社会主義初級段階」の生産力の低水準や階級社会の厳然たる階層の存在を窺わせるが、其より可笑しかったのは、深刻な問題は農民の教育だと言う建国初期の自説との不整合だ。農民の守旧性を見抜いた其の論断を裏付ける様に、毛の号令で上海から黒龍江省に行かされた本稿筆者が営林所や電力建設会社で、農民・小市民出身の労働者や幹部から受けた「再教育」は、宣伝媒介が唱える立派な革命原理とは凡そ無関係の「大実話」（本音）が殆どだ。此の文脈で思い出した例は、「缺什麼都別缺錢，得什麼都別得病」（どんな物が不足でも構わないが、金だけは不足に成るな。どんな物も買って好いが、病気だけは貰うな）だ。

解放戦争中に林彪の野戦軍の勢力圏内だった東北で聞いた此の格言は、中国人の日常的な損得勘定（「缺」=欠損）の1つの究極の判断を示す。大学者・錢鐘書の小説・『困城』（1947年。日本語版=荒井健・中島長文・中島みどり訳『結婚狂詩曲』、岩波文庫、1988年）に、「真理是赤裸々の」（真理は赤裸々である）と言う台詞が有り、一糸も纏わぬとまでは行かないながら肉体の露出度の高い女性が「局部真理」（部分的真理）との綽名が付けられた。真理の性質を言い得て妙であるが、本稿で挙げた多くの民間の格言は左様な物だ。「衣食住」の語順に体面意識を読み取った本稿筆者の観方は、此处でも支援材料を得たが、表原理と裏原理の回転扉を潜って更に翻って思えば、服を纏わぬのが人間の本来の姿だ。紅衛兵「5大領袖」に対する毛の脅かし（註145参照）は、味も素っ気も無く乱暴とさえ思えるが、暴走の歯止めになった結果は評価できる。

葉群の金の無心は熟語の「背に腹は替えられぬ」の通りだが、輸入薬品の高価も一因と考えられよう。江青も新華社通信に立て替えにさせた輸入フィルムを清算する際に、担当者の配慮で原価分のみ請求されたのに、予想外の数千円にも上ったので、渋々払いながらも立腹し、毛に千円ほどの援助をねだった（楊銀禄『毛沢東夫人 江青の真実』、69～70頁）。医療保障の梯子を外された今の中国では、人々が最も危惧する事態の1つは、高価な外国薬品の投入が必要な難病・奇病を患う事だ。昔の貧乏人は強盗や匪賊に「要錢，還是要命？」（金を取るか、命を取るか）と迫られた時、「要錢沒有，要命有一條！」（金は無い。命なら有る）と言う聞き直り方が有ったが、命が惜しくても金が無いとは気の毒な話である。

先進国との科学技術や所得水準、貨幣価値の差を実感させる事象だが、健康の維持に人1倍の必要と努力が強いられる要人に成ると、其の原因に因る金欠は尚更理解できる。但し、林彪の私邸が軍費で1万余り平米まで建増しされ、3千万元を費やして杭州で別荘が造られ、高価な紫外線防止ガラスが西独から輸入された（林青山『林彪伝』、台湾・大村文化出版、1995年、2～7頁）等の例の様に、中央首長は余り困るまいはずなので、葉群の集りは別の側面でも不審を抱かせる。一番尤もらしい口実で金を吸い上げ実際は別途に流用する可能性も思い付くが、申告でき

ぬ治療の故の不明朗も考え得る。林が毛に長生を勧められた契機は阿片常用の悪習であるが、其の醜聞は特段の禁忌として嚴重に封印されていた。重要な行事で元気になる為に彼は阿片の注射を受けていたが、「或る種の薬」とは阿片の治療薬が阿片かも知れず、何れも忌避の対象か域内では発売禁止のはずだ。

禁断の果実と言え、1986年の文化部副部長（副大臣）・周而復（上海の作家）解任事件が思い出される。前年訪日中の「国家の尊厳、党の道德紀律を著しく傷付けた」行為が罪名とされたが、靖国神社見学を除いて詳細は未公表の為に憶測を呼んだ。日本の新聞でもポルノショップに立ち寄ったとの風説が伝えられた（『朝日新聞』同年3月3日。同紙で2月7日に伝えたAPP電の買春説は、此の報道では消えた）が、中央首長の為に回春剤を購入した云々の噂が中国で広がった。彼を起用した胡耀邦総書記への当て擦りの疑いも有る失脚の真相はまだに闇の中だが、大衆の想像は現実を屈折ながら映した。現に、毛も主治医に抛れば催淫剤の注射を受け、ルーマニア女医が開発した強精 - 長寿薬に関心を寄せた（李志綏『毛沢東の私生活』、上、143～145頁）。

楊銀禄『江青の真実』の中で最も衝撃的な事実は、江青が若返りの為に黄永勝・邱会作を真似し兵隊の血を自分の体内に注入させた事（70～76頁）だ。吸血鬼じみた行為で職権濫用も甚だしいが、嬉々として毛に報告した彼女の無邪気は2つの常識を浮き彫りにする。本稿筆者は「文革」中に中学の同級生から、高級将領が健康促進の為に兵隊の骨髄を自分に移植させ兵隊が廃人に成った話を聞いた。事実無根だとしても黄・邱等の実話を考えれば、風説の流布自体は真実を示唆する現象だ。其の噂の伝え手も聞き手も残忍さを感じつつ有り得る事と割り切ったのは、人権感覚の薄さと共に要人の特権に対する諦観が大きい。毛は流石に彼女を叱り止めさせたものの、人権侵害を重く視ず自然の摂理に沿って生きようとの一般論を述べただけだ。毛自身はそんな事はしなかったが、道教の性の指南『素女経』等を熱心に研究し、女体から活力を吸収する「採陰補陽」の術を実践した、と言う（李志綏『毛沢東の私生活』、下、68～69頁）。

採補の対象と受益者こそ違うが、長生不老の悲願は古来の権力者の不易な心理である。毛沢東時代も昔の「統治（支配）階級」の習性と訣別し切れなかったが、江青が献血した2人の護衛を質素ながら食事でもてなした事は、野蛮な搾取・略奪と一線を劃している。輸血の事実を口外せぬよう願った忸怩たる思いと合わせて、私利の算盤の中にも『論語』の礼儀が有ったわけだ。彼女が上記の私用フィルム代の請求額に立腹したのは確かに筋違いの話だが、数年分の立て替えを1969年党大会の後に清算しようとした事は評価して能い。毛の誕生日祝宴は自らの「祝寿」禁則に抵触したとも見られるが、権力者の誕生日祝いが贈収賄の格好な口実だった旧中国の実態と見比べるまでも無く、人畜無害の愛嬌話として受け止めたい。建前と裏原理の2方から交互に眺めれば、此の様に相反する観方が同時に出来る。

件の王維国の逸話で最後に注目したい点は、服従を天職とする軍隊や「副統帥」の権勢が絶大な「文革」時代に於いても、林彪への上納が無条件で行なわれたわけではない事だ。王は林彪の為に拳銃を持って自ら毛沢東暗殺の機会を窺ったとされたが、外貨調達のような安い御用も渋ったので、果たして「死党」（死ぬ程の忠誠心を持つ私党）と言えるかは疑問だ。其の真偽の判断はさて置き、慣例を顧みぬ其の抗命の動機を掘り下げよう。「不辱君命」（君主の命令を辱しめぬ【損わぬ】）を第1級の土の条件に挙げた孔子の命題（『論語・子路篇』）に対して、孫子は「将在外、君命有所不受」（将軍は外に在っては、君主の命令を受けぬ場合も有る）と言った。後者は戦場での臨機応変の必要性が理由だが、王の独自の判断は在外の将軍が自らの恥辱を避ける為に主の命令を敢えて撥ね返した節も有ろう。

青野・方雷『鄧小平在1976 天安門事件』に拠れば、1976年の天安門事件の際に、武力行使を許可する毛の指示を受けて政治局が具体策を検討した時、江青・張春橋の軍隊出動・発砲弾圧の強硬論に対して、同じ「4人組」の王洪文は、「要帶武器可以呀！要開槍也可以呀！反正我王某人不承担這個罪名。你們誰敢下這道命令，現在就請簽字吧。」（武器の携帯を認めたいなら構わないよ。発砲を認めたいなら其も構わないよ。然しとにかく此の私は其の罪名を被らない。あんたたちの誰かが此の命令を下す度胸が有るなら、今此処で署名するが好い）、と一喝して皆を黙らせた。（197頁）

上海で鉄棒等を用いる武闘を指揮した事が有るだけに、彼が反対に回ったのは興味深い。地方の「造反司令」から党中央副主席に昇進した後の保身とも取れるが、汚名を忌む拒絶反応は中国人の栄辱意識の素直な発露だ。王維国も自己名義で外貨を申請する事に抵抗を覚えたのだろうが、「文革」派に山東に次いで河北の人が多かったと言う勝見洋一の指摘（『中国料理の迷宮』、232頁）と結び付ければ、同じ山東以北の河北の王維国と吉林の王洪文の態度は吟味に値する。我田引水に考えれば、北方の理・礼優先と言う仮説の支援材料にも成ろう。西安の労働者を経て当時唯一人の女性副総理に成った呉桂賢も席上、道義上の理由で軍隊の出動に反対した。

革命は道義を重んじる必要が無く本日の議題は福祉ではないと主張した張春橋は、「暴発戸」（成り上がり）の王洪文と違って享樂を貪らぬ点に於いて、同じ名誉重視の志向を窺わせた。1989年の天安門事件の際に、河北省・保定に駐屯する38軍の軍団長が弾圧命令を拒み処分を受けた様だが、張良編『天安門文書』には、楊尚昆が問題の徐勤先を徐海東大将の息子とし、徐海東の息子でも不服従は許されぬと鄧小平が語った場面が有り、中国語版の原註として2人は親子ではないとも記された（230頁）。故装甲兵司令・許光達上將の息子とも一時噂されたが、事実誤認にも関わらず上記の会話が成されたとすれば、親と自分の声価を強く意識する中国人の行動原理が窺える。姓を自称に用いた「我王某人」云々は、一族の名誉を連想させる意味深の表現だ。当軍は朝鮮戦争で大善戦に因り、志願軍司令・彭徳懐の表彰電報で、“38軍万歳！”と言う中共軍史上空前の礼讃を受けた（王樹増『中国人民志願軍征戦紀実』、解放軍文芸出版社、2000年、353～354頁。内外の一部の文献では毛沢東の言としたが、伝説の自己増幅と思われる）から、集団の名誉も徐軍団長の胸中に去来したのかも知れない。

猶、武器の使用に就いて多くの部隊が署名付きの命令に拘ったのも、其の13年前の王洪文の啖呵を思い浮かべれば頷ける。王維国の抗命に林彪夫妻がどう仕様も無かったのは、超法規的な命令は撥ね返しても能いと言う理の優位性の証だ。

147) 原籍（父親の出身地）が四川省高県と成り上海で生まれた李鵬は、3歳で重慶に送られ、12歳で陝西省・延安に送られ、17歳以降は河北省や東北3省・北京で勤務したので、長江下流域との実質的な縁は薄い。

148) 江青・張春橋・康生の他、山東省出身の主な「文革」派急先鋒には、閔鋒・戚本禹（「中共中央文革領導小組」構成員）、于会泳（文化相）、遲群（清華大学革命委員会主任）、魯瑛（『人民日報』編集長）、王効禹（山東省革命委員会主任）、劉結挺（過激武闘派として有名な四川省革命委員会副主任）等が居た。康生夫人・曹鞅欧（党中央委員、康生弁公室〔事務所〕主任）も山東の人。

党中央警備師団に山東の人が多かった事を裏付ける様に、遲群は「文革」前は8341部隊の政治部宣伝科副課長で、戚本禹も党中央弁公庁の中堅幹部だった。戚本禹と王効禹の名前の共通項

「禹」は、黄河を治める事で有名な歴史人物だから、黄河の下流に当り水害に見舞われ易い土地柄に似合う。江青の水泳下手の話（註129参照）と絡むが、彼女が公開の場で自分の後継者

の筆頭とした于の名前 「会泳」は、「水泳が出来る」意である。

林彪一味と「4人組」は「文革」後の合同裁判の様に好く一緒にされるが、山東閩は大体「4人組」の方で固まり、林彪集団は湖北・江西等華中・華南・西南の出身者が多く（少数の山東人の1人は空軍副参謀長・胡萍）、「中央文革小組」組長・陳伯達も福建同郷の葉群の夫・林彪の方に付いた。梁山泊好漢を生み出した土地の反逆者が今回は殆ど文官だった事と合わせて、興味深い棲み分けである。

勝負洋一は山東料理と上海料理の話に絡んで、「文革」派要人に於ける山東出身者の高い比重を取り上げた（『中国料理の迷宮』、230～233頁）。典型例として、1967年2月に中南海・懐仁堂で開かれた打ち合わせ会（所謂「2月逆流」「大鬧懐仁堂」事件）の顔触れが挙げられ、議長・周恩来の2側に座り向き合う形で激突した古参幹部と「文革」派の氏名と出身地は、次の席次表で整理された。

片方 陳毅（四川）・葉劍英（広東）・聶榮臻（四川）・徐向前（山西）・李富春（湖南）・李先念（湖北）・譚震林（湖南）・余秋里（湖西）・谷牧

反対側 江青（山東）・陳伯達（福建）・康生（山東）・張春橋（山東）・姚文元（浙江）・王力（江蘇）・閔鋒（山東）・戚本禹（山東）

斯く直観的に示すと確かに説得力が有るが、「上海組」と呼ばれた「文革」派に山東人が多かった事に今の中国人も驚く云々は、事実誤認か論旨を主張する為の誇張と思われる。図表の中の谷牧の出身地の欠落も同様に、著者の情報不足か情報操作かが判らない。隣の余秋里の「湖西」は明らかな誤謬（正しくは江西）で、中国に関する著者や編集者の土地勘と「歴史勘」（本稿筆者の造語。註92参照）の不十分を露呈した。何しろ、中国の省には「湖西」は無いし、江西は中共の指導者を輩出した地域として名高い（因みに、「独臂將軍」の異名で知られ、解放軍総財務部長、石油工業相を経て鄧小平時代に軍総政治部主任、副総理と成った余の故郷 吉安県は、註132で触れた鄧小平の第1代先祖と同じ土地だ）。猶、王維国（註146参照）を「空軍第1政治委員」とした（232頁）のも誤記だ。

明記されなかった谷牧の出身地は実は山東なのだが、余秋里と同じ経済担当の閣僚で知名度も大差が無いので、調べが簡単に付くはずなのに、空白の儘で処理されたのは変哲だ。山東出身の「文革」派対非山東人の反「文革」派の図式を維持する為の臆化だとすれば、客観的な事実と本質の真実の2方に抵触する嫌いが有る。黒・白相互内包の「陰陽魚」の原理で考えれば、対立陣営に同じ地方の人間が居ても普通な事だ。現に、周恩来は出身地に拠って江蘇の人だとしても原籍に拠って浙江の人だとしても、「文革」派の王力・姚文元と共通項を持つ。林彪事件後に再起した鄧小平の下で「文革」派と闘った万里も、他ならぬ山東の出身である。此の様に、明快で意外性の有る図式ほど独走・膨脹・変形の危険が高い。

司任『魯瑛と「文革」時期的 人民日報』にも、山東出身の「文革」派要人の多さが言及された（司任主編『「文化大革命」風雲人物訪談録』、中央民族出版社、1993年、357～358頁）が、本稿筆者は其の特定の時期の特殊な事象に注目しつつも地域性を絶対視しない。現に、首都紅衛兵の「5大領袖」（註145参照）の出身地には、山東は皆無（聶元梓は河南、蒯大富・韓愛晶は江蘇、譚厚蘭は湖南、王大賓は四川）だし、周恩来の原籍・紹興で生まれた錢浩亮・陳阿大とも悪名高い「文革」派だ。江青の寵愛を受けて文化部次官に成った錢は京劇俳優だからまだままだが、上海労働者造反組織のボスの1人・陳は武闘と放蕩しか能が無く、故郷の『論語』+「算盤」の伝統に泥を塗る無恥・無知な男だ。註145で上海出身の2人の外相 錢其琛と唐家璇を比較

したが、周恩来の逝去後に江青寄りの為に失脚した外相・喬冠華（註62参照）と、同じ江蘇北部の塩城の人・胡喬木（毛沢東の政治秘書を経て党中央宣伝部門の長年の責任者）とは、名前の中の漢字の共有まで共通項が有るだけに別々の歩みは示唆的だ。

山東人の名誉の為に反「文革」の英雄も取り上げて置きたいが、代表格は何と言っても全国総工会（労働者組合総本部）副主席・陳少敏だ。1968年の党中央総会で劉少奇の党籍剥奪が可決されたが、公式発表の「満場一致」に反して1人だけ不賛成に回ったのが彼女だ（日本語訳の文献で其の経緯が詳細に出たのは、張濤之著、伏見茂・陳栄芳・沈宝慶訳『中華人民共和国演義4文化大革命』、冒険社、1996年〔原典＝花城出版社、同年〕、287～290頁）。同郷の康生に同意を迫られても曲げず其の日に逮捕された彼女は、後に多くの中央委員から敬服・慙愧の念が持たれたが、毛の威勢も顧みぬ処が凄い。

拳手採決の際に右手を胸に当てて体をテーブルに伏せた其の意思表示は、武田泰淳が講えた中華民族の無抵抗の抵抗とも言える。泰淳が『淫女と豪傑 《金瓶梅》と《水滸伝》』（1947年）の中で引いた山東好汉の快拳 殺人現場に「殺人者打虎武松也！」（人を殺す者は虎を殺す武松也）の宣言を堂々と書き残す事の大胆不敵は、此の現代女傑伝説にも現われた。尤も、江青・康生等の野望は逆方向の反逆とも見受けられる。

註129で江青の武則天への心酔に言及したが、彼女の女帝の出身地 今の山西省文水県は、奇しくも中共の女傑・劉胡蘭の家郷だ。劉は1947年に15歳で入党し、同年に国民党軍の掃蕩で公開処刑された。毛沢東は其の健気な成長と壮絶な献身を、「生的偉大、死的光荣」（偉大な生、光荣有る死）と讃えた。彼女の事績は新中国の思想教育の手本と成り、筆者も幼い頃から其の英雄伝説を聞かされた。本稿の執筆に当って武則天との地縁上の接点に初めて気付いたが、陰陽の相互内包原理で考えれば別に驚くまい。権力の頂点で辣腕を揮った武と在野の闘争で従容と死に赴いた劉が、俱に男勝りの強烈な剛毅さを持ち、同じ土地で生まれ毛・江夫妻を媒介に繋がる事は、本稿の論旨の格好な裏付けに成る。

- 149) 陳舜臣は曰く、「中国人なら、大抵の人は煬帝を知っている。そして百人の内99人は“自らの楽しみの為に国を滅ぼした皇帝”として知っている。(略)西の乾燥地帯に近い大興城より中原の洛陽の方が確かに気候も穏やかで過ごし易い。江南は更に温暖で、穀倉の為食事も格段に美味い。まして当時は北方から独立した形で漢民族が文化を花開かせた先進地であった為、北の草原に育った煬帝が憧れたのも無理は無い。煬帝が愛した江南の中心地揚州には、春、煬帝が愛した瓊花という白い可憐な花が咲く。煬帝は此の花を見る為に運河を造り、船を浮かべて揚州までやって来たのだという伝説が地元には残されている。/(略)然し此の話、幼い頃から煬帝伝説を何度も聞かされて来た中国人ならともかく、私の様に疑り深い性格の者には逆に一種の気味悪さを感じさせるのだ。(略)話が出来過ぎていて、何か“口裏を合わせた様な”胡散臭さを感じるのである。幾らスケールの違う中国とは言え、仮にも歴史に大きな足跡を残した大皇帝が楽しみの方だけにこんな事をするだろうか。」(陳舜臣・鎌田茂雄・NHK取材班著『NHKスペシャル 故宮至宝が語る中華5千年』第2巻、202頁)

中国に関する深い洞察で有名な華人作家の此の観方は、常識の裏を鋭く衝いた物であるが、懷疑精神がもっと強いはずの中国人が信じ込む理由が考えさせられる。井波律子は曰く、「煬帝の場合は、大運河の開鑿さえ、華北から風光明媚な江南に直接賑々しく乗り込みたいという、極く個人的な欲望の充足を目指す物であった様に、其の奢侈は徹頭徹尾、現世的快樂志向に基づいていた事である。」(『酒池肉林』、46頁)其の命題の通り「物量主義・大快樂主義」(註68参照)を

中国の君主の普遍的な願望として認めれば、深層の真相は明快に見えて来る。

杜牧の「長安迴望繡成堆，山頂千門次第開。一騎紅塵妃子笑，無人知是荔枝來。」(『過華宮絶句3首』1)は、楊貴妃の歡心を買う為に皇帝が馬を連日に交替で走らせ、新鮮な荔枝を南方から取り寄せたとの伝説から生まれた名句だ。同じ「直ぐ」を言う中国語の中で「立刻」(即刻)が緊迫性が最も高く、「馬上」や「赶快」は幅が有るが、正に馬の上に騎って「快」(速く)「赶」(急ぐ)と言う其の過程を考えても納得する。建国国宴の江蘇料理採用の調達力誇示の意図に関する勝見洋一の直観(註139)と結び付いても興味津々だが、毛沢東時代の空軍が中央首長の為に特別機で「時鮮」(旬の食べ物)を運んでいた事から推せば、其の荔枝伝説は大権を活用して大欲を達成した事実と観て間違い無い。

江青が自己正当化の為に引いた熟語の「大臣出巡，地動山揺」(大臣が都を出れば，地が動き山が揺れる。中央の高官を接待する為に地方の関係者が大騒ぐする事の比喩)は，好からぬ特権階級の威張りとして毛・周に戒められたが，江青の場合に顕著だった(楊銀禄『江青の真実』，83頁)此の傾向は彼等にも有った。何しろ2人の特別機の飛行中，周の場合は沿線の空域，毛の場合は全国の空域で総ての飛行が禁じられていた(李克菲・彭東海『秘密專機上の領袖們』，122頁)。毛の専用列車が走行中，彼の気儘な散策の為に臨時停車で広域の運行が好く大幅に乱れた事も広く知れ渡るが，「天下大乱」の字面に合う其の乱心は独裁統治の威勢を思わせる。

3年に亘る全国的な大飢饉の最中の1960年から3年掛けて，毛の故郷に巨額の家計予算を投じて彼の別荘が建てられたのは，外ならぬ毛が「3年困難時期」の初年に出した要求が発端だ(金振林著，竹内実監訳，松本英紀・李潔訳『毛沢東・謎の12日間 文化大革命発動の真相』，悠思社，1992年[原典=『毛沢東隠踪之謎』，『花地』1989年5月号所収]，104～118頁)。江青の我が儘は権限に正比例して規模が彼には及ばないが，休養先で騒音を嫌って附近の工場に操業停止を命じたり，突貫工事でプールを造らせて置きながら1度も行かなかったり，気晴らしで空軍の大型輸送機4機を使って杭州の名茶を北京に移植させたりした(楊銀禄『江青の真実』，60～63頁)等の振る舞いは，往年の女帝の威風を連想させるのに充分だ。最後の方の遊びは風土の違いで移植が失敗し，「江南の橘，江北の枳と成る」にも至らず，文字通り無茶な実験に終わったが，此の挿話の中の杭州に対する憧れも興味を引く。

金の首領・完顔亮が江南への侵攻を決意した契機は，柳永の詞・『望海潮』で杭州の素晴らしさに憧れた事だと言われる。周恩来が愛読した(後述)『宋詞選』(胡雲翼選註。上海古籍出版社，1962年)の講釈(42頁)も，錢塘江の壯観，西湖の秀麗，杭州の繁栄を謳歌した此の名作は思わぬ災禍を招来した，と言う古人の説を引いた(『羅大経《鶴林玉露》説：“此詞流播，金主亮聞歌，欣然有慕於‘三秋桂子，十里荷花’，遂起投鞭渡江之志。”)更に，「金主送死之媒」と捉える羅の観方も引用された。)『文革』直後の大学文科教材 遊国恩・王起・蕭滌非・季鎮淮・費振剛主編『中国文学史』3(人民文学出版社，1979年)は，「相伝金主完顔亮因此“起投鞭渡江之志”(見《鶴林玉露》)，雖不可靠，却可以想見它的社会影響。」と言う(40頁)。信用し切れぬと断った上で風説を記さねば成らなかった処に，時代を超える伝説の絶大な影響力が窺われる。

地方長官の「政績」(統治の実績)を礼賛する為に書いた此の作品は，当時の都市の繁華と民衆の平和な生活を美化し過ぎた嫌いが有る，と上記の『中国文学史』は断じたが，其の所為で羨望の故の侵略を招いたとすれば運命の悪戯としか言い様が無い。但し，毛沢東の詞・『沁園春・雪』(1936年)を吟味しても，素晴らしい山河が征服欲を刺激し得る事が解る。史上の5大帝王(秦始皇・漢武帝・唐太宗・宋太祖・成吉思汗)を礼讃する有名な件の前に，「江山如此多嬌，引

無数英雄競争折腰。」（江山かくのごと多嬌かしく、無数の英雄を引て競に折腰をせしめぬ。竹内実訳。武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』、216頁）、と言う。

此の2句の前の「須晴日、看紅装素裹、分外妖娆。」（紅の装と素き裹を見れば、殊の外妖しく嬌かしからん）は、秦（陝西）晋（山西）高原の雪の壮麗さを詠む物だが、熟語の「英雄難過美人關」（英雄も美人の魅力に抗し難い）が想起される。蘇軾の「水光潑灑晴方好，山色空濛雨亦奇。欲把西湖比西子，淡粧濃抹總相宜。」も、自然の絶勝・西湖を同じ越の絶世の佳人・西施に見立て其の魅力を讃えた秀作だ。其の千古麗人並みの江南の景勝地が北方の狩猟民族の首領の心を動かしたとは、充分に有り得る話なのである。現に、秦晋高原の陝西北部根拠地での雌伏・遊撃を10年余り強いられた毛は、建国後多くの地方に別荘を持ったが、珍しい1地2別荘は杭州の劉荘と汪荘であった。

其の両方とも昔の茶の商人の別荘（劉荘の由来は李志綏『毛沢東の私生活』にも出ている[上、286頁]）だから、同じ商売が盛んで水墨画的な景色が多い点で、胡锦涛の原籍 安徽との接点が浮上する。其の「利」と「力」の連環に符合して、杭州滞在中に代る代る2ヶ所に泊まると言う安全上の理由も有った様だが、複数の別荘と頻繁な滞在は杭州への偏愛を窺わせる。中共中央文献室編『毛沢東詩詞集』（1996年）も傍証に挙げられるが、毛の生前に大半が発表された「正編」42首と死後公開の「副編」25首は、傑出と凡庸、公と私の両面を見せている。後者には杭州絡みの作品は、2割弱の4首も占めている（1955年の『五律・看山』、『七絶・五雲山』、『七絶・莫干山』と'57年の『七絶・觀潮』。最初の2首は固有名詞の「杭州」が登場し杭州の景勝を詠む物であり、後の2首は杭州近辺の銭塘江の潮の観想である）。

上記の蘇軾『飲湖上 初晴後雨2首』（1073年）のほぼ丸9百年後、国交正常化の為に訪中するニクソン大統領は北京・上海の次に、杭州まで案内され 劉荘 に宿泊した（陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』、319頁）。其の最高な訪問地・宿泊先の選定は中国側の接待の意気込み、及び官・民感覚の重層を感じさせる。何しろ「上有天堂，下有蘇杭」（註139参照）と言う様に、杭州は地上楽園の代名詞と成り、新婚旅行の候補地としても常に一番の人気を集めている。

註139で触れた党中央のスターリンへの誕生日贈り物を再び引き合いに出すが、江青は故郷・山東省の野菜に続いて、湖南刺繍のスターリン像、景德鎮の陶磁器、浙江省の龍井茶、安徽省の祁門紅茶、江西省の竹の子、福建省の漆器、杭州の紡績品と刺繍等を提案した（出所同前）。毛の故郷・湖南が2番目に出たのは、周恩来に由る建国国宴の江蘇料理の湖南風アレンジと同異曲だが、杭州の特殊な位置は此の選定でも好く判る。浙江省の特産と分類された龍井茶は、他ならぬ杭州が最も有名な産地である。毛は龍井茶を格別に好み、子女に飲ませぬ程の高級品に拘り（李敏著、多田宏敏訳『我が父 毛沢東』、近代文芸社、2001年[原典=『我的父親毛沢東』、遼寧文芸出版社、2000年]、362～363頁）、大飢饉の年代に肉料理を止めても其の贅沢を止めた話は聞かぬから、彼の物質・精神の生活に対する杭州の寄与と影響は実に高い。

国情の体现度を選定の物差しとした江青の発案は農産物と手工芸品の組み合わせも妙だが、茶と竹は昔の文人が肉料理より高次の享受の対象としたので尚更妙味が有る。工芸品の産地 浙江・安徽・江西、福建は、正に本稿で焦点を当てた華東沿海文化圏だが、江西に在る景德鎮は「文革」中の鄧小平の逸話を想起させる。彼は江西での軟禁生活を終えた際わざわざ景德鎮に赴き、内外で有名な陶磁器工場で制作の全過程を見物し、其処で贈呈された花瓶を北京に持ち帰り大事に収蔵したが、娘が旺盛な好奇心の表現とした此の一齣（毛毛著、藤野彰・鏝屋一他訳『我

が父・鄧小平「文革」歲月』、中央公論社、2002年〔原典＝『我的父親・鄧小平「文革」歲月』、中央文献出版社、2000年〕、上、384～387頁〕は、優れた物産・景観・文化に対する傑物の「慕名」(名声を慕う事)・宿願の程を示唆する。

当時の鄧も建国当初の江青も権勢が無かったので庶民的な選好と言えるが、江が選んだ工芸品は知名度からすれば順当だ。其処で毛と杭州の接点に刺繍が現われ、「湘(湖南)繡」の声価を改めて思い知った。「革命不是請客吃飯,不是繪畫繡花」(革命は招宴でもなく、絵画・刺繍でもない)と彼は断じたが、前半は飲食接待の伝統の根強さの裏返しで、後半は故郷の工芸の発達が根底に有った事か。同じ有名な「蘇繡」が江青の案に無いのは、杭州と蘇州の格差の反映と思われる。「上有天堂,下有蘇杭」の2地の順は別に「蘇高杭低」を意味せず、「杭」が「堂」と同じ韻を踏む事や声調順(「蘇」「杭」は其々第1,2声)に由るが、2地とも刺繍の名産地であるから、成語の「錦繡山河」(錦で刺繍された様な麗しい山河)の代表格に相応しい。

金の首領が杭州の景色に傾倒したのも、中華民族の古今の王・民の大欲を考えれば頷ける。隋煬帝の享楽目的の大運河開鑿の伝説を民衆が疑わぬのは、祖国の山河の抗し難い魅力に対する自慢が一因に挙げられる。人民大会堂を飾る美術品の最大な目玉の中国画の題は、正に毛の祖国礼讃を用いた『江山如此多嬌』である。天下一の秀麗さが災いした杭州の遭難は、「出る杭は打たれる」の字面と語義を体現した。武田泰淳は滅亡体験に因る中華民族の叡智を、複雑で成熟した情欲を育まれた女体に見立てたが、戦争中の多くの中国女性は操と命を守る為に、故意に顔を汚しボロボロの服で魅力を隠すよう心掛けていた。其でも強姦を逃れ切れぬ場合も有るから、「紅顔」と「薄命」の相関も相対的である。

『江山如此多嬌』は「文革」中、作者の傅抱石(江西出身、江蘇省国画院院長。「文革」直前に逝去)・関山月(広東出身、広東省国画院院長)の冤罪に因り外され、「文革」後復活したが、国会議事堂の画竜点睛を成す象徴性には、国土に対する英雄や権力の征服欲と占有権の表出がある。「王道楽土」の理想に因る言えば、君主が国土を享楽に使う伝統は昔から有った。註146のみみっちい裏金作りの話と矛盾する様だが、林彪は権勢を利用して大量な国土を軍事用の名目で占有し、保養地として部下に与え人心を収攬した(林青山『林彪伝』、7頁)。彼等は陰で毛の「封建的社会主义」を非難したが、所詮五十歩百歩なのである。「文革」中期に戦備の為に中央要人が全国各地に疎開したが、林彪が蘇州に落ち着いたのは意味深長だ。小林秀雄は『蘇州』(1938年)の中で、中国の庭園は阿片を吸い美女を抱く富豪の退廃的な享楽欲求に合うと喝破したが、林・毛の私生活の不健康・不道德の噂と結び付ければ合点が行く。左様な道楽を王の特権として容認する意識が毛の時代にも残った事は、人民を国家の主人公とする建前と抵触するが、自分も其の地位に就けば同じ事をしたい大衆の願望が窺える。隋煬帝南巡に伴う大運河開鑿の伝説の市民権は、似た追体験の潜在意識に支えられる物か。

隋煬帝の恣意的な大運河開鑿が結果的に南北の交通を便利にしたのは、是と非、善と悪等が相互転化する「怪圈」(メビウスの帯)めく現象だ。酒池肉林の退廃を極め、大勢の美女に絹紐で行楽用の船を流れに逆らって曳航させ、大運河の開鑿で夥しい人命を失わせた隋煬帝は、民衆には極悪人と見られるのに、国家を南北に直結させた偉大な統一家として毛に高く評価された、と李志綏は批判的に述べた(『毛沢東の私生活』、上、169頁)が、建国初めに北京・頤和園を観覧した際の感想と併せ考えれば一理を感じる。同行の柳亜子(詩人、宋慶齡・何香凝と並ぶ「国民党3賢」の1人)は、民衆の血と汗で自分の楽園を建造させた西太后を「可恥」(恥じるべし)と指弾したが、毛は曰く、彼女が海軍予算を流用した事は当時では犯罪だったが、今から観れば、

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

仮に海軍を建設しても帝国主義への土産に成るのが落ちで、頤和園は帝国主義に持って行かれる事が無く、人民に享受できるから、彼等が贅沢な無駄遣いをしたのよりはましだ。（彬子編『毛沢東的感情世界』、吉林人民出版社、1990年、186頁）

黒い猫でも鼠が獲れれば好い猫だとする結果主義、「此一時也、彼一時也。此亦一是非、彼亦一是非」の相対原理は、此处でも面目躍如たる処だった。更に逆説的に思えば、君主の行楽用の工程は費用の多寡が知れるし、後ろ目痛さに因る歯止めが掛り易い。危険なのは寧ろ「大躍進」の類いの、大真面目な国家建設の工程である。昨今推進されて来た三峡ダム建設や「南水北調」「西（天然）気東送」は、毛の生前から青写真が出来ただけに、秦始皇や隋煬帝の気宇壮大な統一・建設に心酔した雑念、及び其故の思慮の雑さが無かったのか気に懸かる。

陳舜臣の文に出た揚州の可憐な瓊花は、映画・『紅色娘子軍連』（赤い女性中隊）の主人公瓊花を連想させる。海南島・瓊崖地区の赤軍女性中隊の事績を基にした此の作品（1960年）は、人気投票に由る《百花奨》を獲った。「瓊花」は「瓊崖」に因んだ名前と思われるが、「文革」前の映画の最高榮譽の獲得は隋煬帝を魅了した瓊花伝説と結び付ければ面白い。奇しくも海南島は本稿冒頭の「下海」の「熱点」であり、上海出身の監督・謝晋の「文革」後の『芙蓉鎮』も、「家畜の様に活き抜け」の名台詞を介して陳舜臣の中国観と関わる（註93参照）。

「文革」中に革命現代パレーに改編された『紅色娘子軍』は、ニクソン訪中時の政府主催文芸夕べの目玉にも成った。国民党軍を負かす話の政治的な意図と共に、「文化革命」の旗手・江青の自己顕示の欲求も見え隠れしたが、江の意向で「瓊花」が「清華」に改名された事は興味深い。「呉」に難癖が付かなかつたのは、無産階級の「無」との同音のお陰だと思えるが、元の名前は「窮花」と同音で貧しい女性の表徴たり得るのに、江は「花」の可憐な形象を嫌った事か。其の正統な意識形態に基づいて工夫された「清華」は、朱鎔基の母校と周恩来の進学希望先の最高学府（註156参照）の名と重なり、江の低学歴の劣等感を映し出す。

尤も、江沢民時代の党中央軍事委員会副主席・劉華清や、上記の杜牧の詩の題に出た「華宮」即ち華清宮、楊貴妃の入浴で有名な華清池の名を思い起こせば、「清」に対する選好や「華」と連用する傾向も解る。巡り巡って、杜牧の多くの名作は任官地の揚州で生まれた物で、同地出身の江沢民の持ち歌 江蘇民謡・『好一朵茉莉花』（素敵な茉莉花）も、可憐な花を歌う内容である。

150) 田中角栄首相訪中の2ヶ月前の1972年7月、周恩来と公明党委員長・竹入義勝の会談でこんな問答が有った。「周 田中さんは佐々木（更三・社会党委員長）さんと同じ県の出身ですか。/竹入 首相は新潟県で、佐々木さんは宮城県です。/周 同じ東北です。ズウズウ弁が入っていますか。/竹入 首相はズウズウ弁ではありません。」（『日中国交正常化交渉の記録 外務省開示文書から』、『読売新聞』2001年6月23日）

本稿筆者を含む多くの中国人が「ズーズー弁」を知った契機は、「文革」直後に上映され映画・『砂の器』（監督＝野村芳太郎。1974年）だ。松本清張の原作小説（1961年）を読み返すと、日本に於ける「ズーズー弁＝東北訛り」の認識や「ズーズー弁」への差別が出ている。作中に登場した研究著書・『出雲奥地に於ける方言の研究』は曰く、「出雲は越後並びに東北地方と同じ様に、ズーズー弁が使われている。世に此を“出雲弁”と出雲訛り或いはズーズー弁と称えられて判らない発音として軽蔑されている。」（新潮文庫、1990年、上、264頁）

其の差別は高度成長期の日本の神話の影に映ったが、前大臣の娘と婚約した新進作曲家が貧困の出自と家族の癩病を忌避し、戦後の混乱に乗じて大阪出身の戸籍を偽造し過去の知人を抹殺

した。其の忌々しい事件の犯人が意外に理解され易かったのは、中国でも「麻瘋病」(癩病)や貧困への偏見が強い故だ。本稿の「笑貧不笑娼」の例示とも繋がるが、上記の越後は田中角栄の故郷と『雪国』の舞台 新潟を含む。一方、出雲が在る島根県は竹下登元首相の故郷で、東京との1票の格差の断突の大きさや選挙傾向が示す様に有数な過疎地帯と保守王国だ。

犯人と同じ若手文芸家集団の評論家も、東京で山形出身のタクシー運転手から秋田方言を指摘されて不機嫌に成った(同上, 148頁)。「蘇北話」も上海で似た響きがするので、周は理解を込めて「ズーズー弁」に言及したのかも知れぬ。尤も、周の発音は周りから単に「南方口音」(南方訛り)と捉えられた(程華『周恩来和他的秘書們』, 59, 336頁。「三原則」が「三原之」に聞こえたと言う例[336頁]は、厳密に言えば江蘇北部の訛り)。国土の広い幅に因り物理的に差別し切れぬ事から、特定地域に対する差別は皮肉にも成り立ち難いわけた。

英・米等では発音・声調を以て人の階層を判別し差別する傾向が有る様だが、中国では標準語は必ずしも教養の条件には成らず、逆に標準語の基盤 北京と東北の発音も、天津・上海・広東等の訛りと同様に漫才のネタとされる。漢語のあらゆる方言がお笑い芸人の射程内に在り、槍玉が上がった地域の人間も割り切って其の茶化を楽しむ状況は、考えて観れば奇異な気もするが、2つの逆説に気付かされる。第1、米国並みの人種の坩堝だから皆が平気でいられる。第2、嘲笑の対象たり得る事自体が安心材料だ。少数民族の言葉が余り風刺の標的にされぬのは、^{うが}穿って考えるなら、尊重の現われと共に軽視や異端視の裏返しでもある。

猶、李鵬、江沢民が周恩来と二重写しに成る為か、江蘇北部の訛りを敢えて使う事も面白い。

151)「家畜に成っても活き抜け」や家畜管理 国家統治の話(註93参照)とも絡むが、江沢民の懐刀と言われる曾慶紅の父親 毛沢東時代に交通工作部長(交通相。部長=大臣)、紡績工業部長、商業部長、内務部長を歴任した曾山は、高新に抛れば、私塾で学んだ後に屠畜業者と成り、自分の店を持ち豚を殺して肉を売っていたが、土地のボスの弾圧で商売を中止せざるを得なくなり、其処から社会への反逆精神を持つ様になった(『中国高級幹部人脈・経歴事典』, 174頁)。

屠畜業は中国でも卑しい職種と見られていたが、毛の「卑賤者最光栄、高貴者最愚蠢」(卑賤な者は最も栄光有り、高貴な者は最も愚かだ)の様に、共産党時代では逆に労働階級の「政治資本」なり得る(政治的な点数稼ぎの材料を言う此の熟語は、「政治動物+経済動物」の複合性格を感じさせる)。本稿筆者は「文革」前に上海の小学校の社会科授業で、労働尊重の意識を深める教育として、大学宿舍構内の食堂飼育場で豚の屠宰を見学した事が有る。容赦無く斬られた豚が血塗れの姿と憐れな表情でもがき絶命に至った過程は、振り返ると其の時代の一部の死刑公開執行と同じく非情で刺激が強過ぎるが、「執行人」は結構誇り高く腕前を真剣に披露し、生徒も大真面目に見入っていた。翻って思えば、荘子の「庖丁解牛」も君主が職人の爛熟した屠宰技術を見学し、帝王学の手本を得た寓話である。

中共は蒋介石を「屠夫」「劊子手」(屠宰人。殺し屋)呼ばわりしたが、巡り巡って建国後の第3世代領袖の懐刀の父親の職業・実績も其の渾名と似通う。革命に投身した後の曾山は土地のボスを人民裁判で処刑し(高新。同上)、屠宰の対象は「階級の敵」にも及んだわけだ。家郷の江西が中共軍の発祥地と初期の本拠地である事は其の「屠刀」に合致するが、党中央弁公庁主任(事務総長。幹事長)・党中央組織部長の要職に昇り詰めた息子の歩みは、毛沢東時代の党中央弁公庁主任を経て華国鋒時代に政治局常務委員に昇進した江西の人・汪東興と重なる。

曾山は毛沢東時代に先ず中共華東軍政委員会副主任兼財經委員会主任、上海市副市長を始め、一連の「経済戦線」の要職を経て内務部長を務めた。最後の方は中央要人の情報^{かなめ}を握る枢密の要

に当るが、「経済戦線」の字面通り其の経歴は利+力の2元に跨がる。「利」「力」は字形に「刀」を共有するが、早年に嘗んだ屠畜業も刀と算盤、力と利の複合性格を持つ。息子が同じ商都から同じ内政畑で頭角を顕わしたのは、「儒商・徳治」時代の天の采配とも言うべきか。

周・毛の最後の主治医を観ると、張佐良は浮浪児の出自で政治的に信頼できるとされ（程華『周恩来和他的秘書們』、517頁）、逆に5世代に亘る医師の家系と同治帝の侍医を務めた曾祖父を持ち、若い頃に国民党の外郭団体に入った事の有る李志綏も信任を受けた（『毛沢東の私生活』、上、26～27、98～99頁）。「出身貧苦」「歴史清白」を貴ぶ毛沢東時代でも、絶対の基準は無く清濁合わせて人を用いる側面が有った。曾山の経歴・系譜は更に、同じ人や家系に於ける変易・転変の可能性と振幅を示唆する。彼は肉体労働と商売から出発し末に高官の地位に就いたが、父親は清末の秀才（科学院試合格者）で後に家運が傾いた（同上）。

鄧小平の娘は族譜を点検する際に、数多く的高官経験者を誇示する一方、動乱の為に一時乞食をした第1代祖先の足跡をも披露した（毛毛『我が父・鄧小平 若き革命家の肖像』、55頁）。鄧小平の波瀾万丈の人生と結び付くまでも無く、中国では栄枯盛衰や「高低貴賤」は常に相対的な物である。其の鄧氏1族の開祖が高官として蜀に入った1380年（註132参照）は、鄧小平の改革・開放元年（1979年）との間に、干支の10巡り（60年×10）や恰度6世紀に限り無く近い連環が見られるが、歴史の連続と非連続を吟味すれば別の発見も出る。

註148で鄧氏1族の開祖と「独臂將軍」・余秋里の同郷関係に触れたが、曾山も同じ江西省吉安の人で、長征に参加した少数の女性赤軍の1人なる妻の名 鄧六金は、鄧と其の赤軍時代の妻・金維映と繋がる（金は失脚の鄧と別れて李維漢と結婚し、息子・李鉄映は鄧小平時代に政治局に入った）。曾慶紅は父親が「文革」中に病死した後、同郷・戦友の誼に由る余の面倒見を受け、余の秘書を務め出世の端緒を掴めた。母親が中共華東局保育院（幹部・烈士の子女を預ける施設）の院長を務めた事も彼の人脈形成に寄与した様だ（高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』、176～181頁）が、鄧小平以後の領袖の腹心が鄧小平の先祖や忠実な部下・余と接点や絆を持つ人物である事も、或いは天の采配と言えよう。

「文革」後逸早く鄧を見舞いに行ったのが余秋里だが、戦争中片腕を失った彼に対して鄧の子女は、「4人組」失脚の伝達を聞いて1人だけ拍手しなかったのが余叔父さんと皆が言っている、と無遠慮に冗談を飛ばした。余は大笑いしながら、「彼奴等は無闇に儂をからかって面白がっているのだ！片手じゃ拍手しようにも仕様が無いじゃないか。然し、儂にだって遣り方が有る！片手で机を敲いたぞ！」と応じ一同の爆笑を誘った。（毛毛『我が父・鄧小平 「文革」歳月』、下、354～355頁）同時代の日本人から観れば質の悪い笑い話だろうが、曾慶紅と同じ「太子党」の1員なる鄧の長男・朴方も、「文革」中の自殺未遂で永久に半身不随と成ったから、他者の苦痛を己れの幸福の確認材料にする意識は無かったはずだ。但し、現実を客観的に受け止める達観も感じられる其の遣り取りは、身体障害者を表わす毛沢東時代の「残廢」と同じく、配慮の不足も否めるまい。鄧小平時代に「残疾人」と改称したのは時代の進歩と言うべきだが、「片手落ち」や「皮切り」まで差別語扱いにする当世日本の風習は、毛沢東時代の無神経と対極に神経質の観も有る。

家畜屠宰業や差別の話に絡んで、『辞海』第4版（1989年）の「部落民」の次の解を引き合いに出そう。「日本中世期“賤民”的後裔。原被加以“穢多”、“非人”等辱称，明治維新後改称“新平民”或“平民”。現汎称“部落民”，意指“特殊部落”的“公民”，居社会最低階層。約200万人（1975年），分布全国各地，多集中居住在近畿、四国等地方。在城市從事屠宰、製革、竹木

手工芸以及街道清掃、土木建築、搬運等所謂“賤業”；在農村則務農、捕魚。備受壓迫和歧視，曾進行長期鬥爭。1918年積極參加了“米騷動”。第二次世界大戰後，掀起群眾性運動，並成立了“部落解放同盟”。

昨今の日本に於ける差別語自粛や差別語狩りの徹底ぶり（例えば、本稿筆者が使っていた某大手メーカーの1988年製のワープロの日本語ソフトには、「部落」や「賤民」等の語彙は最初から無い）を考えるまでもなく、現在の汎称に関する記述は事実誤認に近く、社会の最下層に居るとの位置付けや代表的な職種・居住区の例示も、其を禁句とする同時代の日本人には憚られる物だ（同時期の『広辞苑』第4版[1991年]の「部落」の解は、「身分的・社会的に強い差別待遇を受けて来た人々が集団的に住む地域。江戸時代に形成され、其の住民は1871年（明治4）法制上は身分を解放されたが、社会的差別は現在なお完全には根絶されていない」に止まる）が、被抑圧階級や泥臭い仕事を差別しない中共の理念に沿った邪気の無い扱い方と思える。

尤も、職業には高低・貴賤の差は無いと中共が唱え続けたのは、日本ほど酷くないにせよ職業差別が一部存在する現実の裏返しだ。特定地域に対する職業絡みの差別が相対的に少ないのも、所謂「賤業」や従事する人が特定の地域に固まっていなかった事と共に、「笑貧不笑娼」の熟語が示す様に、技能で生計を立てる事や生計の為に手段を問わぬ事を肯定する常識も一因だ。江蘇北部の人間が上海で受けた差別も、突き詰めれば2地の際立った貧富の格差が最大の要因だ。

胡鞍鋼の国内の「4つの世界」（後述）の論理に即して穿って考えれば、相対的に豊かな「第2世界」の人間もより豊かな「第1世界」から見下されかねないし、最も貧しい「第4世界」は全人口の半数も占める。他の地域を威張って差別し得る地域は全人口の2%しか無い北京や上海に限られ、逆に貧困の故に差別されても可笑しくない地域は膨大な範囲の為に差別し切れず、或いは豊かな地域や階層と関わる機会さえ無い事で、結果的に余り差別が生じない節も有る。

鄧小平は毛沢東時代の「貧困な社会主義」を打破すべく「先富」を提唱したが、其の対概念として本稿筆者が思い付いた造語の「共貧」は、「共に貧困な状態」と「共産党時代の貧困な共産主義」の2義に引っかけ。中共を象徴する赤は極貧の形容詞でもあるが、旧中国の赤貧を変えなければ「赤化」は意味が無い。「親方日の丸」に因んで日本人が名付けた毛沢東時代の「親方5星紅旗」は、中国流で「吃大鍋飯」（大きな釜で[一律均等の]飯を食う）と言う。振り返って観ると、経済格差を人為的に無視した其の悪平等は、経済的な貢献度の高い地域の意欲を削ぐだけでなく、貧困地域にとっても万年窮乏に甘んじる微温湯と成るから好くない。

上記の論評は本稿の本筋から逸れた様だが、中国の多面性や共産党時代の暗部の解明に繋がる。「第1世界」の上海の中でも、裕福な階層が多く住む中心部は「上只角」（上の界限）、肉体労働者が多く住む周辺区域は「下只角」（下の界限）と呼ばれる。阪神大震災の時に芦屋市と神戸市長田区の被害の対照的な軽重で、貧富の格差は此処でも不公平な待遇に繋がることの嘆きが有った（佐野真一『世紀末の光景』、『文芸春秋』1995年3月号、124頁）が、1937年8月13日の日本軍空爆で閘北区が最も犠牲と成った事も類似の現象だ。張佐良の経歴にも8.13空爆の被害が有り（程華『周恩来和他的秘書們』、517頁）、其の「出身很苦」（大変困苦の家庭の出身）は周恩来の主治医に抜擢された要因でもあるが、共産党時代でも当該地域の人間が過去の固定形象で差別を長らく受け続けた。

興信所を使う日本流の身上調査と違って、中国では職場や当人への問い合わせで個人情報を出し出すのが普通だ。其処で明らかに成った出自に因って差別が生じるのは、日本の同和問題にも似通うが、差別は雇用では見られず結婚の面に集中した。本稿筆者の親戚（原籍は上海、出身地

は南京）も約10年前、上海閘北区出身の大学の同級生に嫁ぐ際、一部の関係者に多少の違和感を持たれた。但し、改革・開放がもたらした意識の変化や職・住の流動性に因り、左様な観念は日増しに稀薄に成って来ており、此の2人も米国に移住し子供まで米国籍を取った。

3代で原籍が変る制度の有為転変を促す妙に此处で気付くが、中国は巨視的な時空や高次元から眺めれば、やはり変易の可能性を豊富に孕んだ人種の坩堝である。江蘇北部の人間への差別が根強い上海に江沢民が根を下ろし、上海の女性と結婚した（夫人・王冶坪は江の上海出身の継母・王者蘭の姪。高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』、29、36頁）のは、故郷・揚州は商業・文化の繁盛を誇る都会であると共に、上海人の「聡明、素質好」（註153参照）に勝つとも劣らぬ彼の才覚に負う処が大きい。孟子は「天・地・人」3才の価値順位を、「天時不如地利，地利不如人和」としたが、個人の才覚を重んじる人本主義は中国の常識だ。

152) 周恩来の出身地は江蘇省北部の淮安県。劉邦の故郷・沛県、項羽の故郷・下相（今の宿遷県）も江蘇の北部に在り、俱に「兵家必争之地」（戦争の双方が必ず争奪し合う地）・徐州の附近で、北の山東や西の安徽に近い。因みに、淮陰侯・項羽の蜂起と戦死の地 呉と烏江は、其々江蘇省蘇州市と安徽省和县に当る。

153) 出身地や訛りに基づいて、周を江蘇省淮安の人と認識する向きが中国に多いが、『辞海』の「周恩来」の項は「浙江紹興人、生於江蘇淮安」と言う。彼が1946年に或る米国記者に3回に亘って語り、1982年に夫人の校閲で内部刊行物に発表された経歴は、分量がが少ない（1万字程度）ながら最も詳細な自叙伝とされる（南山・南哲主編『周恩来生平』、上、523～533頁）。其の中でも彼は曰く、「我的祖父叫周殿魁，生在浙江紹興。按中国的習慣傳統，籍貫從祖代算起，因此，我算是浙江紹興人。」（私の祖父は周殿魁と言い、浙江・紹興で生まれた。中国の習慣的な伝統に従って、本籍は祖父の代から数えるので、此に因り私は浙江・紹興の人と成る。）

戸籍の一貫性を連想させる「籍貫」（本籍）の字面と裏腹に、周の出自は2地に跨った背景には、可能性を追う中国人の流動性の高さが有る。周の述懐の通り、紹興の中・上層を占めたのは知識人と商人で、俱に外への進出が特徴である。此の2つの群の『論語』と「算盤」は、周の「礼・利」の重層の根底を成した様に思え、4要諦図の「下半球」に当る此の2元の位置は、周の低姿勢に符合する。

本稿で掘り下げた昔の中国人の究極の夢 「金榜題名時」と関わるが、周の祖父の名・「殿魁」は科挙試験での「奪魁」（優勝を勝ち取る事）、皇帝に由る「殿試」（皇居宮殿での面接）に臨む願望を織り込めた物か（祖父の名は「攀龍」の説も有る [ウィルソン『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』、3頁] が、天へ登り詰める上昇志向は其と一緒だ）。周も言及した様に、紹興は「師爺」（幕僚）の産地として有名だが、此の職種の資格は他ならぬ『論語』+算盤だ。

周は祖父までの数代も江西省・南昌出身の母方の祖父も「師爺」だから、中共最大の智囊と成ったのは宿命を感じさせる。2家が結合した契機は周の祖父の代で江蘇の淮陰と淮安に赴任した事だが、周の文武両道の地下水脈を示唆する様に、紹興は古代の「書聖」・王羲之に続いて現代の文豪・魯迅を中国の文化に貢献し、南昌は周が指揮した蜂起で中共軍の発祥地と成った。

中国の研究者の最近の調査に拠れば周は魯迅の遠い親戚に当るが、2人とも没落官僚の家庭で生まれた事は興味深い。周は父親の世代で家運が傾いた要因に、資産は家屋のみで土地を持たぬ事と見栄を張る事を挙げた（ウィルソン『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』、2頁）が、総理として国家の資産形成に腐心し（一例は金相場の安い時に輸入を増やし準備高を高めた事）、私生活においても儉約を貫いた事は、先代の教訓を汲み取った節も有ろう。因みに、父親の名・「貽能」と

省政府財務部職員の務めは、超能史・周恩來の誕生の母体として意味深長だ。其の所属部署は算盤が必要と成る点で、胡錦濤の父親の仕事 雑貨店の会計（經理）と通じる。

ウィルソンに拠ると、周は曾て兄弟や従兄弟たちと共に毎年、紹興に在る祖父の先祖代々の邸へ行き、先祖の位牌に礼拝した（『周恩來 不倒翁波瀾の生涯』、3頁）。何時から何時までの「毎年」かの明記が無いのは瑕疵だが、其の旧家詣では中共の指導者も脱出できぬ中国の旧習の根強さの証だ。思うに、共産党時代にも生きて来た原籍の概念規定と位置付けは、血統・文化の2面で先祖との連続性を認識させる帰属意識の産出・維持装置に思える。

此の制度は否応無しに中国人社会の求心力に寄与した反面、高い流動性の裏返しでありながら流動性を否める要素も含まれる。本稿筆者の例を挙げれば、父親の出身地に随って戸籍上の原籍は四川省・合江県と成っているが、当の父親は若い頃に上海の大学に進学した後1度も故郷に帰らず、筆者も其処を訪ねる事は永久に無からうから、前近代的な不条理も感じる。毛沢東時代では原籍は管制対象の強制送還先や勤務の配属先等に好く選ばれたので、不都合を避ける為に筆者は成人後、履歴書の「原籍」「出生地」の欄に俱に「上海」と記す事にした。生後の個人情報を在職中ずっと保管する職場の人事部門は、原本と照合する等して記載の不整合に厳格なはずなのに、数回の転職先では全然疑念が持たれなかった。

此の個人的な体験は直ちに建前と現実の乖離や原籍意識の有名無実の結論を導くまいが、筆者自身は四川+上海の重層が出来た上で後者に重みを置くのが事実だ。同じ地縁の中でも血（血統）より水（風土・暮らし）が勝る其の順位優先は、生活歴に拠る実際の絆の深さの他に、「天府之国」の美名が物語る様に一部の富裕地域も有る四川の中の田舎町が比喩物に成らぬ程の、曾て「東方の巴里」と呼ばれた中国最大の国際都市の見栄の好きも無くはない。

鄧小平は「南巡講話」で上海の「人材優勢」を讃え、「上海人聡明、素質好」と持ち上げた（『視察上海時的談話』[1991年1月28日～2月18日]、『鄧小平文選』、第3巻、366頁）が、上海人として誇りを感じる傍ら四川人として鄧の偉業に共鳴を覚えたのは、筆者の御都合主義を超えて中国的な「1身2籍」（「1国2制度」を擬った筆者の造語）の幅の所以だ。

「都合」は字面に「俱に合う」意を含み、語義に「合計する」と有るが、周の原籍と出身地も俱に筋に合い、而も相乗の影響を持ち合った。彼が紹興を原点として強調したのは、文化面の優位に因る価値判断も有ったかも知れぬ。因みに、彼は上記の会見で母親の事を語る際に開口一番、「我的母親長得很漂亮，為人善良」（私の母親は大変な美人で、人にも優しくった）と、先ず外見の好さを誇った。

父方・母方の祖父及び父親の件と此の母親の件との間に、周は母方の祖母を淮陰の農村の女性として紹介し、其の存在に因り自分の血には農民の成分も有ると語った。紹興の官僚とは対極に見えるが、中共の価値観では革命の主力軍なる農民は知識人より高い「家庭出身」とされたので、同工異曲の誇示とも思われる。物理的に遠い紹興を尊びつつ淮安の窮乏を評価の材料に転化した姿勢と効果は、別の意味で『増広賢文』の「窮在鬧市無人識，富在深山有遠親」を連想させる。

周を「浙江紹興人，生於江蘇淮安」と記した『辞海』では、「淮安」の項に「為周恩來同志故郷（周恩來同志の故郷と為り），有“周恩來同志故居”と有り，「紹興」の記述は「有魯迅、秋瑾故居和（＝並びに）周恩來祖居」に止まる。2地の事実上の親疎は此処ではっきりするが、註149の陳少敏・劉胡蘭・武則天の生地の話と関連して、俱に女傑所縁の地である点が面白い。反清の恐怖活動で処刑された秋瑾は、「絶命詞」（辞世の句）の「秋風秋雨愁殺人」（武田泰淳に由る伝記[1968年]の題）と共に名高い。『辞海』の「淮安」に其の祠（靈廟）の所在が記された

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）（夏）

梁紅玉は、同辞書の「梁紅玉」「梁夫人」の通り、夫・韓世忠と共に金に抵抗した南宋の將軍だ。史書に記載が無い彼女は、秋瑾と別の意味で伝説的な人物と言えるが、周の英雄志向の形成に対する2人の影響は一考の価値がある。

周の自己規定や体制の正式な見解に関わらず、彼が江蘇・淮安の人として広く認識されて来たのも、興味を引く事象である。理由の「口音」（訛り）と「口味」（味覚の好み）は何れも口と関わるから、「名」の字形に含まれる事も含めて「初めに口有りき」の原理も成り立とう。其の「蘇北口音」は放送媒体の伝播で知れ渡ったが、複数の秘書は「家郷菜」（故郷の料理）の「淮陽菜」に対する彼の愛着を証言した（程華『周恩来和他的秘書們』、289、294頁。「淮陽」は「淮揚」[註139参照]の誤りか。『辞海』の解の通り、「淮陽」は河南省の地域名）。

夫人が故郷・河南の食べ物を好んだ事（同、295頁）と同様に、人間の生理的な素地の強固さが思い知らされるが、周が好きな「獅子頭」（同、294頁）は江沢民の故郷の揚州料理の代表格でもある。「肉末」（ミンチ）で作るでかい肉団子を「百獣之王」の頭と名付けるのは、如何にも中国的な覇気の表現だ。興味深い事に、鄧小平も周と同様「獅子頭」を作るのが得意だった（毛毛『我が父・鄧小平「文革」嵐月』、上、332頁）。味・色の淡白さを特徴とする広東料理も、名物の「龍虎鬪」の名と材料（蛇肉と猫肉）の様に、人を食う奇抜さが一面に有る。因みに、毛が周の「保守性」を非難した1958年の南寧（広西壮族自治区）会議の際、会食に出た此の珍味は脂濃い故に、大勢の参加者は食べ難かったが、毛だけは舌鼓を打った、と言う（李志綏『毛沢東の私生活』、上、320頁）。

猶、周は唐辛子を好まぬ点で毛と違うが、気分高揚の時に「紅焼肉」（豚肉の醤油煮込み）を切望した（程華『周恩来和他的秘書們』、294頁）習性は一緒だ。

154) 12歳の毛沢東が通った私塾の師・郭伯勳が彼の大成を予感した理由は、勉学の才能や資質の他に女性の様な相貌や発声があった。留候・張良に対する太史公・司馬遷の賞讃「余以為其人必魁梧奇偉，至見其図，狀貌如婦人好女」が思い浮かんだ、と言う。（尹高朝編著『毛沢東の老師們』、36頁）

一方、周恩来は端正な顔立ちや甲高い声の故に、中学で常に女役として舞台上に立っていた。其を自慢する彼に対して、女々しいとか倒錯と捉える友人も居たし、或る米国学者は潜在的な同性愛の示唆とさえ見たが、此の史実と反応を取り上げたウィルソンの観方の通り、其の女役に就いて深く詮索する必要は無く、其の成功は単に芝居が大好きで、順応性に富み、人をうっとりさせる魅力を備えていただけの事だ。（『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』、14頁）付け加えれば、完全な虚構が現実の脚色の要素の強い演劇で異性を巧く扮した事は、太極図の黒・白の相互内包を引き合いに出すまでもなく、2重の高次の複合能力・魅力と言うべきだ。

更に付け加えるなら、2人とも「男人女相」の一面を持ちながら、男の中の男の名に恥じない。「美男子」「貴公子」の美称が付く周の相貌の特徴は他ならぬ剛毅であり、林彪と同じ濃い眉も男性的な特徴だ。毛の学生時代の異名「毛奇」は、抜群の身長を形容する上記の「魁梧奇偉」にも吻合するが、其の頑丈な長身は「南人北相」の観も有る。竹内実毛沢東の会見記で、次の通り記した。「（略）背が高い。肩幅も広い。しかも堅牢な感じがした。よく中国の絵に描かれている猛虎を思い出した。ぐっと張った両肩は、そのような絵の虎にそっくりだった。全体に骨太で、南方の中国人特有の柔軟さは無かった。」（『動よりは静の人 毛沢東 忘れ得ぬ人』。『文芸春秋』2000年2月臨時増刊号『私たちが生きた20世紀』、221頁）鄧小平と対照的に背が高い江沢民も北方の華国鋒並みに見栄が好いが、身長に反比例する華・鄧の実力や貢献度は、見栄

と内実の乖離を思い知らせる点でも陰陽原理と繋がる。

155) 江沢民が上海交通大学を卒業した1947年、朱鎔基は清華大学に入ったが、彼は上海交通大学を同時に受験し2方合格した(高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』, 48頁)。

156) 周恩来が進学した天津・南開中学は実は第2希望で、第1希望の清華中学(清華大学の前身)が不合格と成ったのは、合格判定で各地域出身者の^{バランス}均衡を配慮する学校の方針に因り、学力と競争率の高い長江流域の受講者が不利を蒙った故だ、と言う(ウィルソン『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』, 11頁)。

“ 儒商・徳治 ” 之道：以理、礼、力、利為軸心的 中国政治之統治文化 (3)

本論文以反映中国近10多年来時代精神的“ 儒商 ”, 及指明新世紀方向的“ 徳治 ” 為關鍵詞彙, 探索以理、礼、力、利為軸心的中国政治之統治文化原理。

本部分繼前述儒家所包含的“ 經濟動物 ” 性, 通過对『論語』的剖析, 進一步指出中国人的“ 政治動物性 ” 的本質。在把握政治、經濟、文化等方面的南北、東西之間の地区差異的基礎上, 將大地区的氣質指向与前述“ 4要諦図 ” 相聯系, 提出“ 西南・華中 力 ”、“ 華東・華南 利 ”、“ 北方 理 + 礼 ” 的仮説。進而以中共各要人故郷の形而上屬性為線索, 從建国後各歴史時期的最高領導層の變遷中, 發現如下“ 工作重点轉移 ” 的軌跡: “ 文革 ” 前以“ 力治 ” 為主, “ 利治 ” 為輔; “ 文革 ” 中“ 力治・理治 ” 發達, 而“ 利治 ” 衰退; 鄧小平時代“ 力治・利治・理治 ” 相結合; 江沢民時代“ 理治・利治 ” 相輔相成。

(XIA, Gang 本学部教授)